

死者と追悼をめぐる意識調査（抄）

森謙二（茨城キリスト教大学）

I 調査の主体と内容

本調査は、日本学術振興会による科学研究費補助金（基盤研究 A）「死者と追悼をめぐる意識変化—葬送と墓についての総合的研究」（研究代表者 東北大学大学院教授鈴木岩弓・研究期間=平成 14 年度～平成 16 年度）に基づくものであり、その内容は①お墓をめぐる諸問題、②宗教団体への所属の問題、③葬儀をめぐる諸問題、④宗教意識をめぐる諸問題 ⑤戦没者祭祀をめぐる問題に区分される。この調査項目は全体の共同研究の過程で議論されたものではあるが、概ね次のように分担をした。調査項目を作成するあたり、①については、主に森謙二が担当し、平成 10 年 2 月に実施した「墓地に関する意識調査」（平成 9 年度厚生科学研究特別研究事業 主任研究者 森謙二）を踏まえた内容になっている。③については主に村上が担当し、東京都生活局が平成 13 年に実施した『葬儀に関わる費用等調査』を踏まえた内容になっている。②については全国規模の調査がこれまでにはなく、④については新聞各社により意識調査が実施されており、これらを踏まえた上で、主に鈴木岩弓がこれらを担当した。⑤については全員の議論を通じて作成したものである。

この調査結果の一部については、すでに「全国調査 葬送と墓の意識(1)～(3)」(『寺門興隆』2003 年 11 月～2004 年 1 月)で公表し、(1)「墓をめぐる問題」については森が、(2)「葬式をめぐる問題」については村上が、(3)「宗教意識をめぐる問題」については鈴木が執筆分担した。本報告書は、これらの成果を踏まえてのものであるが、資料整理および分析については全体を通じて森が行った。村上・鈴木の分析については、あわせて上記文献を参照願えれば幸甚である。

また、調査の実施に関しては(社)新情報センターに委託して行った。したがって、調査の基本データについては(社)新情報センターによって提供されたものであるが、その整理・分析にあたっては、私たち独自のデータベースを作成し、分析を行った。たとえば、今回の調査は訪問留置法ということもあり、欠損値(無回答)が多いケースがあった。欠損値をそのまま「無回答」として計算するのも 1 つの方法ではあるが、クロス集計あるいは多重回答の場合、これを欠損値あるいは無回答としてそのまま処理することによって複雑になることもあり、集計の処理上、欠損値を除いて計算をすることにした。ただ、単純集計では、欠損値を含めたものを「構成比(1)として」、欠損値を除いたもの「構成比(2)」として計算している。したがって、すでに『寺門興隆』において公表した数値と若干ではあるが違いが出てくることになるので、ご了解いただきたい。なお、データの分析に際しては、SPSS の統計ソフトを用いた。

II 調査の概要（略）

問1 あなたは現在、お墓について何か問題をかかえていますか。次の中から該当するものを3つ以内でお選びください

この質問は、回答者が抱えているお墓の問題について尋ねたものである。現実に墓地問題を抱えているのは回答者の約3分の1であり、3分の2は「特にない」と回答している。回答者が抱える墓地問題としては「墓地・墓石が高い」(30.5%)「墓がない」(27.5%)「漠然とした不安」(26.3%)「継承したお墓の管理」(10.8%)「お墓の承継者がいない」(8.2%)「今ある墓に入りたくない」(8.2%)となっている。

Q1-1 あなたにとっての墓地問題

墓地問題(複数回答)	実数	構成比(1)	構成比(2)
墓がない	171	12.1%	27.5%
墓地・墓石が高い	189	13.4%	30.5%
承継者がいない	51	3.6%	8.2%
今ある墓に入りたくない	45	3.2%	7.2%
承継した墓の管理	67	4.8%	10.8%
散骨	39	2.8%	6.3%
漠然とした不安	164	11.6%	26.3%
その他	15	1.1%	2.4%
特にない	924	65.6%	--
無回答	12	0.9%	--
合計	1409(1677)	119.2%	119.2%

構成比(1)は、「無回答」を含めた構成比
 構成比(2)は、「無回答」「特にない」を除いた構成比
 Q1は、複数回答であるの構成比は100.0%を超えることになる。

Q1-2 年齢別 × あなたにとっての墓地問題 クロス表

		墓の有 無	墓石が 高い	承継者 がいな い	今ある墓 に入りたく ない	承継し た墓	散骨	漠然とし た不安	その他	特にな い	合計
20-29歳	実数	18	19	5	5	5	5	19	0	156	209
	構成比	8.6%	9.1%	2.4%	2.4%	2.4%	2.4%	9.1%	0.0%	74.6%	111.0%
30-39歳	実数	32	29	6	9	13	3	35	0	159	240
	構成比	13.3%	12.1%	2.5%	3.8%	5.4%	1.3%	14.6%	0.0%	66.3%	119.2%
40-49歳	実数	29	37	5	11	14	9	31	4	144	231
	構成比	12.6%	16.0%	2.2%	4.8%	6.1%	3.9%	13.4%	1.7%	62.3%	122.9%
50-59歳	実数	44	42	15	11	15	15	40	3	168	286
	構成比	15.4%	14.7%	5.2%	3.8%	5.2%	5.2%	14.0%	1.0%	58.7%	123.4%
60-69歳	実数	32	43	15	7	15	5	29	4	161	256
	構成比	12.5%	16.8%	5.9%	2.7%	5.9%	2.0%	11.3%	1.6%	62.9%	121.5%
70歳以上	実数	16	19	5	2	5	2	10	4	136	175
	構成比	9.2%	10.5%	3.3%	1.3%	2.6%	0.7%	5.2%	2.0%	77.8%	113.7%
合計	実数	171	189	51	45	67	39	164	15	924	1397
	構成比	12.2%	13.5%	3.7%	3.2%	4.8%	2.8%	11.7%	1.1%	66.1%	119.2%
男	実数	88	82	28	19	29	16	76	7	460	683
	構成比	12.9%	12.0%	4.1%	2.8%	4.2%	2.3%	11.1%	1.0%	67.3%	117.9%
女	実数	83	107	23	26	38	23	88	8	464	714
	構成比	11.6%	15.0%	3.2%	3.6%	5.3%	3.2%	12.3%	1.1%	65.0%	120.4%
合計	実数	171	189	51	45	67	39	164	15	924	1397
	構成比	12.2%	13.5%	3.7%	3.2%	4.8%	2.8%	11.7%	1.1%	66.1%	119.2%

Q1-2は、「年齢別」と「あなたにとっての墓地問題」のクロス集計である。自分にとっての墓地問題を抱えるのは、30歳から60歳代までであり、20歳代と70歳以上になると「特にない」と回答する人が多かった。20歳代ではまだ若いから、70歳代では問題が解消したということなのだろうか。

30歳代から60歳代といっても、抱える問題の内容は若干異なっている。比較的若い世代では、「承継した墓の管理（承継した墓）」「漠然とした不安」「今ある墓に入りたくない」という問題であるのに対し、40歳代以降になると「墓がないこと」「墓地・墓石が高い」「自分のお墓の承継者がいない」という問題になってくる。

男女別に見ても、それほど大きな差異はないが、「墓石が高い」(3.0%)「漠然とした不安」(1.2%)「承継した墓」(1.1%)「散骨」(0.9%)「今ある墓に入りたくない」(0.8%)というのが男性に比べて高い数値を示している。かつて家墓にはいることを拒絶する女性達が話題になったが、今回の調査では「今ある墓に入りたくない」と回答した女性が特に多い訳ではない（括弧内の数字は男性との差）。

Q1-3 未婚／既婚 と 特にない のクロス表

特にない		はい	合計
未婚	実数	143	197
	構成比	72.6%	100.0%
既婚(配偶者あり)	実数	702	1074
	構成比	65.4%	100.0%
既婚(死別)	実数	57	74
	構成比	77.0%	100.0%
既婚(離別)	実数	21	50
	構成比	42.0%	100.0%
合計	実数	923	1395
	構成比	66.2%	100.0%

Q1-3は、「未婚・既婚」との比較で「あなたにとっての墓地問題」をみたものである。配偶者が死別している場合にはすでにお墓の準備ができてるので問題はないのであるが、配偶者と離別をした人にとってはお墓をどのようにするかは重要な問題となる。

親から承継したお墓の管理問題(10.8%)や、自分のお墓の承継者がいないこと(8.2%)というお墓の承継に関わる問題も現実性を持ち始めてきている。お墓の承継問題には、自分が承継したお墓をどのように管理するかという問題と、自分が入るお墓の承継者がいないという二つの問題があり、前者は承継したお墓を管理することを負担に感じる人が増えたことを意味するのだろう。それは「今ある墓に入りたくない」と回答した人が7.2%いることの中にも表れている。就職等の事由により都会へ移住した場合、田舎に残した墓の管理が大きな負担になってきているのであろう。

また、「漠然とした不安」も大きな割合を占めるようになってきた。少子化の中で慰霊形態が変化し、墓のあり方も変動する中で、なお新しい時代の道筋が見えてこないことの表現だろう。

問2 あなたは、将来自分自身が入る予定のお墓をおもちですか、おもちではありませんか。次の中から当てはまるものをいくつでもお選びください。

Q2は、自分の入る墓があるか、ないかを問うたものである。全体としては、お墓をもつ者が7割強（「親あるいは配偶者の親から承継」=57.9%と「自分あるいは配偶者が取得」=14.5%）、そして墓をもたない人々が約3割である（Q2-1）。しかし、「墓をもっていない人」でも現実には墓を探している人は少ない。墓をもっていない人418人中「墓を探している人」は5.2%であり、1割に満たない。

Q2-1 自分が入るお墓の有無

お墓の有無(複数回答)	実数	構成比(1)	構成比(2)
親から承継	536	38.0%	38.3%
配偶者が親から承継	274	19.4%	19.6%
自分・配偶者が取得	203	14.4%	14.5%
墓をもっていない(探している)	22	1.6%	1.6%
墓をもっていない(探していない)	396	28.1%	28.3%
その他	17	1.2%	1.2%
無回答	10	0.7%	--
合計	1409(1458)	103.5%	103.5%

墓をもたず、現在お墓を探していない人の年齢別の内訳は Q2-2 の通りである。若い世代ほどお墓ももたず墓探しもしていない傾向があるのは当然であろうが、60歳代で17.8%、70歳以上で8.6%の人々が墓をもっておらず、また墓探しもしていない。

お墓をもっている回答した人は全体として7割を超えるが、このなかで1.9%(27人)が自分の親と配偶者の双方からお墓を承継し、1.6%(22名)の人々が親からお墓を承継したにもかかわらず、自分あるいは配偶者がお墓を取得としている。つまり、3.5%の人々が少なくとも2カ所以上のお墓をもっていることになる。

Q2-2 お墓をもたず現在お墓を探していない人々

年齢	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	合計
探していない	97	101	68	69	46	15	396
回答者数	209	236	233	288	259	174	1399
構成比(%)	46.4%	42.8%	29.2%	24.0%	17.8%	8.6%	28.3%

Q2-3 親から受け継いだお墓がどこにあるか

親から承継した墓がどこにあるか	実数	構成比(1)	構成比(2)
居住する地域	473	60.4%	61.0%
同一・隣接した都道府県	187	23.9%	24.1%
遠く離れた場所	113	14.4%	14.6%
その他	3	0.4%	0.4%
無回答	7	0.9%	--
合計	*3 783	100%	100%

*3 親からお墓を承継したのはQ2-1のA1+A2=810人である。この中で27人が自己と配偶者の親の双方からお墓を承継しており、その重複を除くと810-27=783人となる。

親から承継したお墓のある地域は、84.3%（「居住する地域」=60.4%、「同一・隣接した都道府県」=23.9%）の人々は比較的近くにあると回答しているが、14.4%の人々は承継したお墓が遠く離れた場所にあると回答している（Q2-3）。この人々が「承継した遠くにある墓の管理」に負担を感じるようになるのだろう。

フェイスシート（F9）の「あなたは、生まれ育った場所と現在居住している地域は同じですか」という問いでは、「同じ市区町村に居住している」44.4%、「同じ都道府県に居住している」26.6%、「異なる都道府県である」28.6%と回答している。親から承継したお墓が「生まれ育った場所」「現在居住している地域」という人が7割を超えているが、3割程度の人々が異なる都道府県にあると回答している。つまり、生まれた土地から離れて生活をしている人の割合を約3割と考えても良いのだろう。

また、全体として6割弱の人々が親からお墓を承継しているが、親から承継したお墓に入ると回答した人は74.1%に過ぎず、他の25%を超える人々が別の選択肢を選ぶかあるいは態度を決めていない。

Q2-4 あなたは親から承継したお墓に入りますか（Q2SQ2）

親から承継した墓に入るか	実数	構成比(1)	構成比(2)
入る予定	580	74.1%	74.8%
配偶者が難色	11	1.4%	1.4%
親とは別の墓に入る予定	20	2.6%	2.6%
思案中	33	4.2%	4.3%
将来の問題で考えていない	127	16.2%	16.4%
その他	4	0.5%	0.5%
無回答	8	1.0%	--
合計	783	100.0%	100.0%

親から承継した墓に入るかどうかについて「思案中」4.2%、「将来の問題で考えていない」16.2%と20%強の人々の態度は未定である。親と一緒に墓に入らないとする人も出てきている。「親とは別の墓に入る」と回答した人が2.6%、「親と一緒に墓に入ることに配偶者が難色を示している」と回答した人が1.4%いる。

Q2-5(別のお墓に入ることを選択した人に)先祖伝来の墓をどうしますか（Q2SQ2-1）

	実数	構成比(1)	構成比(2)
新しい墓と併用	3	15.0%	16.7%
そのまま放置する	1	5.0%	5.6%
新しい墓に合葬	5	25.0%	27.8%
将来の問題で考えていない	9	45.0%	50.0%
無回答	2	10.0%	--
合計	20	100%	100%

別の墓に入ることを選択した人に、先祖伝来のお墓をどうするかも尋ねてみた。その数は必ずしも大きなものではないので統計的処理にはなじまない。また、「将来の問題で考えていない」と回答した人が半数を占め、

先祖伝来の墓に対してどのように対応するか決めかねている姿も見えてくる。

これまで、先祖（親）から引き継いだお墓は一般的には承継すべきものと考えてきた。長男によるお墓（祭祀）の承継という枠組みはだいぶ以前から崩れていたが、お墓が子孫によって承継すべき対象であるという認識には変化がなかった。承継したお墓に自分たちも入り、子孫に受け継がれていくという構造が、我が国の祭祀承継のシステムであった。今回の意識調査では、このシステムの動揺がデータとして示されている。ここでは、それ

は親から承継したお墓に入ると回答した人が 74.1%であり、約 25%の人々が親から承継したお墓を承継することに何らかの理由で戸惑いを感じるようになってきたことに示される。

問3 将来あなたが入る予定のお墓を継いでくれる人がいますか、いませんか。次の中から1つだけお選びください。

Q3 は、自分が入るお墓の承継者を尋ねたものである。「決まった人がいる」と回答した人は 41.9%、「期待する人がいるが決まっていない」と回答した人は 29.4%となった。「決まった人も期待する人もいない」が 19.9%、「墓を継いでもらうことを希望していない」が 7.7%となっている。平成 10 年の調査と比べたときに、「決まった人がいる」と回答した人が約 10%減少し、「決まった人も期待する人もいない」が約 10%増加している(Q3-1)。

お墓の承継者については子どもの有無が回答に大きな影響を与えている。子どもがいる人のうち「決まった人がいる」「期待する人がいる」と回答したのがは合計 82.9%であるのに対し、子どもがいない人は 27.1%に過ぎない(Q3-2)。

都市規模で見ると、大都市圏では「決まった人がいる」「期待する人がいる」と回答したのが 62.7%に過ぎず、「決まった人も期待する人もいない」が 28.2%、「墓を継いでもらうことを希望しない」が 9.1%になっている。平成 10 年の調査では、大都市圏でも「決まった人がいる」が 43.2%「期待する人がいるが決まっていない」が 23.3%であり、「決まった人も期待する人もいない」が 11.4%、「墓を継いでもらうことを希望しない」が 5.4%に過ぎなかった。この 5 年の間に「決まった人も期待する人もいない」「墓を継いでもらうことを希望しない」と回答する人が急激に増加したことになる。

Q3-1 あなたのお墓を継いでくれる人がいますか 平成 10 年は構成比(%)

あなたのお墓を継いでくれる人	実数	構成比(1)	構成比(2)	平成10年
決まった人がいる	590	41.9%	42.4%	51.2%
期待する人がいるが決まっていない	414	29.4%	29.7%	23.5%
決まった人も期待する人もいない	280	19.9%	20.1%	10.6%
墓を継いでもらうことを希望しない	108	7.7%	7.7%	3.1%
無回答 平成10年 = わからない	17	1.2%	--	11.6%
合計	1409	100%	100%	100%

Q3-2 あなたのお墓を継いでくれる人はいますか(子どもの有無+都市規模別) 数字は構成比(%)

あなたのお墓の承継者	子どもの有無		都市規模			
	いる	いない	大都市	人口10万人以上	人口10万人以下	町村
決まった人がいる	49.6%	12.5%	36.1%	40.0%	44.0%	49.8%
期待する人がいるが決まっていない	33.3%	14.6%	26.6%	29.8%	30.4%	30.7%
決まった人も期待する人もいない	9.2%	60.0%	28.2%	20.1%	16.4%	13.3%
墓を継いでもらうことを希望しない	6.9%	10.5%	9.1%	8.0%	8.0%	5.1%

無回答	0.9%	2.4%	—	2.0%	1.2%	1.0%
合計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

Q3-3 あなたのお墓を継いでくれる人はいますか(年齢×性別) 数字は構成比(%)

あなたのお墓の承継者		20-29 歳	30-39 歳	40-49 歳	50-59 歳	60-70歳	70歳以上	男・計	女・計
決まった人がいる	平成15	12.7%	25.0%	30.9%	46.4%	68.3%	76.1%	40.4%	43.3%
	平成10	8.3%	29.8%	47.0%	60.4%	73.6%	81.7%	48.9%	53.3%
期待する人がいる が決まっていない	平成15	19.3%	33.3%	45.9%	32.5%	21.1%	15.9%	28.5%	30.2%
	平成10	17.1%	36.1%	31.6%	24.6%	13.5%	14.1%	22.0%	24.8%
決まった人も期待 する人もいない	平成15	52.4%	32.1%	13.3%	11.4%	6.4%	5.7%	22.8%	17.1%
	平成10	23.8%	15.7%	10.5%	6.0%	7.4%	2.1%	13.9%	7.6%
墓を継いでもらうこ とを希望しない	平成15	11.3%	8.8%	9.4%	8.3%	3.9%	2.3%	7.6%	7.8%
	平成10	5.2%	6.7%	3.3%	2.1%	1.4%	0%	3.2%	3.0%
無回答 わから ない	平成15	4.2%	0.8%	0.4%	1.4%	0.2%	0%	0.7%	1.7%
	平成10	45.6%	11.8%	7.6%	7.0%	4.1%	2.1%	11.9%	11.3%
合計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

年齢別に見てみると、40歳代と50歳代において大きな変化が起こっていることがわかる。「決まった人がいる」と回答した人は、40歳代で平成10年時に47.0%であったが、平成15年には30.9%と減少し、逆に「決まった人も期待する人もいない」が10.5%から13.3%、「墓を継いでもらうことを希望しない」が3.3%から9.4%へと増加する。50歳代では、「決まった人がいる」と回答した人が60.6%から46.4%に減少し、「決まった人も期待する人もいない」が6.0%から11.4%、「墓を継いでもらうことを希望しない」が2.1%から8.3%へと増加する。

少子化のなかでお墓の承継者の確保が困難になるのは当然のことである。40歳代から50歳代に大きな変化が起こっているのは少子化の影響を反映したものである。我が国では昭和49年以降合計特殊出生率が人口置換水準(2.08)を切り、それ以降2.0を回復することなく少子化が進行する。昭和49年のこの時代は、団塊の世代が結婚適齢期に達した時代であり、この時期から本格的な少子化が始まった。そして、現在ではその団塊の世代が50歳代の中心をしめるようになった。これらの世代では、すでに指摘したお墓の承継問題だけではなく、「墓を継いでもらうことを希望しない」という声にも代表されるように、お墓の承継を拒絶する人も増えてきた。ここに我が国の伝統的な祭祀承継のシステムの揺らぎがあらわれている。

問4 あなたは、普段お墓参りをどの程度なさいますか。最も近いものを1つお選びください。

Q4は、お墓参りの頻度を尋ねたものである。お墓参りに行くのは「年に1～2回」という人がもっとも多く(39.0%)、「年に3～5回」という人(31.0%)がそれに続いている。平成10年の調査に比べると、「ほとんど行かない」が12.9%から15.5%に増えた分だけ、お墓参りの頻度はやや減少したことになる。もっとも、平成2年の総理府の調査では、「ほぼ毎日」0.4%、「週に1～2回」1.1%、「月に1～2回」7.9%、「年に3～4回」31.7%、「年に1～2回」42.7%、「ほとんど行かない」15.2%等となっており、この十数年の間に墓参りの頻度に大きな違いは見られない。ただ、比較的若い世代では「ほとんど行かない」人が増加している。20歳代では、平成2年に28.6%・平成10年に24.9%・平成15年には35.8%、30歳代では20.3%・17.3%・22.9%と、平成10年には30歳代で「ほとんど行かない」人の割合は減少するものも、平成15年には大幅に増加する。現在では、20歳代では三分の一強の人がほとんどお墓参りに行かない。

Q4 お墓参りの頻度

お墓参りに頻度	実数	構成比(1)	構成比(2)	平成10年	平成2年*4
ほぼ毎日	9	0.6%	0.6%	0.5%	0.4%
週に1～2回	13	0.9%	0.9%	1.6%	1.1%
月に1～2回	168	11.9%	12.0%	12.5%	7.9%
年に3～5回	437	31.0%	31.2%	35.4%	31.7%
年に1～2回	549	39.0%	39.2%	36.6%	42.7%
ほとんど行かない	218	15.5%	15.6%	12.9%	15.2%
その他	7	0.5%	0.5%	0.3%	0.4%
無回答	8	0.6%	--	0.2%	0.6%
合計	1409	100%	100%	100%	100%

*4 平成2年は総理府による調査

また、墓参りに「ほとんど行かない」と回答した人を最終学歴から見ると、「中学校」10.7%、「高校」14.0%、「短大・高専」18.0%、「大学・大学院」22.3%であり、高学歴になるほど墓参りの頻度は低くなっている

Q4-2 学歴別に見た墓参りの頻度

墓参りの頻度		中学校(旧制小学校)	高校(旧制中学・高等女学校)	短大・高専(旧制高校)	大学・大学院	合計
ほぼ毎日	構成比	0.9%	0.4%	0.5%	1.2%	0.6%
週に1～2回	構成比	2.3%	0.7%	1.1%	0.4%	0.9%
月に1～2回	構成比	15.3%	14.2%	6.3%	6.0%	11.9%
年に3～5回	構成比	34.9%	33.3%	29.1%	22.7%	31.0%

*5学歴無回答3人(「月に1～2回」1人、「年に1～2回」2名)

年に1～2回	構成比	34.0%	36.5%	43.9%	46.6%	39.0%
ほとんど行かない	構成比	10.7%	14.0%	18.0%	22.3%	15.5%
その他	構成比	1.4%	0.4%	0.0%	0.4%	0.56%

問5 あなたは、先祖からのお墓を受け継いで、それを守って供養することが子孫の義務と考えますか、考えませんか。次の中から1つお選びください。

Q5-1は、先祖を供養することは子孫の義務かどうかを尋ねたものである。「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計では87.7%と祖先祭祀を肯定する傾向が相変わらず強いが、ここでも大きな変動の兆しを読みとることができる。まず、「そう思う」（＝積極的肯定）「どちらかといえばそう思う」（＝消極的肯定）を比較した時、前者の選択する人の割合が減少し、後者を選択するものが増えていることである。特に20歳代では平成10年段階で「そう思う」50.8%・「どちらかといえばそう思う」32.1%であったものが、平成15年段階でそれぞれ25.0%・52.8%、30歳代では平成10年段階で49.0%・37.6%であったものが、平成15年には32.9%・50.8%と、積極的肯定が著しく減少する。また、「そう思わない」（積極的否定）と「どちらかといえばそう思わない」（消極的否定）の合計値は平成10年と比較して平成15年には2.6%増え、40歳代を除いて各世代でその割合が増えて

Q5-1 祖先祭祀についての意識

祖先祭祀は子孫の義務か	実数	構成比(1)	構成比(2)	平成10年
そう思う	655	46.5%	46.7%	63.1%
どちらかと言えばそう思う	581	41.2%	41.4%	26.0%
どちらかと言えばそう思わない	82	5.8%	5.8%	4.5%
そう思わない	85	6.0%	6.1%	4.7%
システム欠損値	6	0.4%	--	1.6%
合計	1409	100%	100%	100%

おり、特に20歳代(14.0%から21.2%)・50歳代(5.3%から10.3%)で増加率が著しい(Q5-2)。

Q5-2 年齢別の祖先祭祀についての意識

祖先の祭祀は子孫の義務か	平成15 平成10	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	男・計	女・計
そう思う	平成15	25.2%	33.1%	45.1%	48.4%	60.5%	70.1%	47.2%	45.8%
	平成10	50.8%	49.0%	57.2%	65.3%	75.0%	82.2%	62.3%	63.9%
どちらかといえば そう思う	平成15	53.3%	51.0%	42.5%	41.2%	32.9%	25.3%	39.2%	43.1%
	平成10	32.1%	37.6%	27.0%	27.4%	19.3%	11.1%	26.1%	26.0%
どちらかといえば そう思わない	平成15	11.0%	7.9%	6.0%	4.8%	2.7%	2.9%	6.0%	5.7%
	平成10	3.6%	7.5%	9.5%	1.1%	2.4%	1.6%	3.8%	5.1%
そう思わない	平成15	10.5%	7.9%	6.4%	5.5%	3.9%	1.7%	7.0%	5.1%

	平成10	10.4%	5.1%	4.6%	4.2%	2.4%	3.1%	6.0%	3.6%
わからない	平成15	--	--	--	--	--	--	--	--
	平成10	3.1%	0.8%	1.6%	2.1%	1.0%	1.6%	1.8%	1.5%

なお、「そう思わない」の合計値について、最終学歴から見ると、「中学校」9.3%、「高校」10.1%、「短大・高専」15.3%、「大学・大学院」16.7%であり、高学歴化とともに「そう思わない」傾向は強くなっていく。高学歴ほど、祖先崇拝に対してのこだわりは低いと言っても良さそうである。

問6 お墓を継いでくれる人がいない人のために、一つの墓を共同利用する合葬式の共同墓(いわゆる「永代供養墓」)が考案されて、現実に利用されています。
問6-1 あなたはこのような合葬式の共同墓をご存知でしたか、ご存知ありませんでしたか
問6-2 あなたは上記のような合葬式の共同墓についてどのように考えますか。次の中から1つお選びください。

Q6 は、いわゆる合葬式共同墓についての質問である。Q6-1 は合葬式共同墓の認知度を尋ね、Q6-2 でその評価について尋ねた。認知度に関しては、平成10年においてはほぼ三分の二(64.5%)が知らないと回答していたのに対し、平成15年には36.8%の人が知らないと回答し、5年間の短期間に急速に認知度を高めたと言える。しかし、合葬式共同墓を積極的に評価する人の割合は8.3%から5.5%に減少し、「やむを得ない」という消極的な肯定が55.7%から71.7%に増えたに過ぎない(Q6-2)。合葬式共同墓はその認知度を高めてきたが、多くの人々がそれを積極的に評価し、それを受容している訳ではない。

Q6-1 合葬式共同墓を知っているか

合葬式共同墓	実数	構成比(1)	平成10年
現在利用している	41	2.9%	--
知っている	327	23.2%	18.0%
聞いたことがある	508	36.1%	17.5%
知らない	518	36.8%	64.5%
無回答 わからない	15	1.1%	--
合計	1409	100%	100%

Q6-2 合葬式共同墓をどのように評価しますか

合葬墓の評価	実数	構成比(1)	平成10年
積極的に評価する	78	5.5%	8.3%
関心を持っている	91	6.5%	5.9%
やむを得ない	1010	71.7%	57.7%
ふさわしくない	147	10.4%	14.6%
その他	52	3.7%	0.3%
無回答 わからない	31	2.2%	13.1%
合計	1409	100%	100.0

Q6-3 年齢別・都市規模別の合葬式共同墓の評価

数字は全て構成比

合葬式共同墓の評価	積極的に評価	関心を持っている	やむを得ない	ふさわしくない	その他	無回答
20-29歳	3.3%	5.2%	70.3%	13.7%	5.2%	2.4%

30-39歳	8.8%	6.7%	70.8%	7.9%	4.2%	1.7%
40-49歳	8.6%	6.4%	73.4%	7.7%	2.6%	1.3%
50-59歳	4.2%	5.5%	75.8%	9.0%	2.8%	2.8%
60-69歳	5.0%	6.6%	71.0%	11.6%	3.9%	1.9%
70歳以上	2.8%	9.1%	66.5%	14.2%	4.0%	3.4%
大都市	6.0%	6.9%	70.2%	13.2%	2.5%	1.3%
人口10万人以上	6.2%	5.9%	73.7%	8.2%	4.2%	1.8%
人口10万人未満	4.0%	8.0%	73.2%	9.2%	2.8%	2.8%
町村	5.1%	5.8%	68.3%	12.6%	4.8%	3.4%
全体	5.5%	6.5%	71.7%	10.4%	3.7%	2.2%

無回答が数%に及ぶので、無回答の数値も含めて計算した。

問7 最近、海や山にお骨を撒く、いわゆる散骨を求める市民団体が登場し、現実に散骨を行う人々も出てきました。あなたは散骨についてどのように思いますか。次の中から1つだけお選びください。

Q7は、散骨について尋ねたものである。Q7-1は散骨についてどう思うかを尋ねたものであるが、「認めるべきである」「本人に希望があれば認めてもよい」という肯定派の合計値が78.2%と8割近くに達し、散骨は一つの葬法として市民権を得たと言っても良いであろう。また、散骨の希望者も増加しているが(25.3%)、この6割以上が「一部の骨を残りをお墓に入れる」形態を希望している。つまり、散骨希望者の6割以上の人々がお墓への納骨を希望している(Q7-2)。

散骨に対する理解は広まってきたものの、散骨場所に関しては「一定の制限を設けるべき」とする割合が多い。散骨場所について「原則として自由に認めるべき」との回答が平成10年の段階で23.0%あったのに対し、平成15年では19.5%に減ってきた。散骨のあり方も、現在、一つの曲がり角に立たされているように思われる(Q7-3)。

Q7-1 散骨についてどのように思うか 平成10年は構成比(1)

散骨についてどう思うか	実数	構成比(1)	平成10年
認めるべきである	88	6.3%	5.6%
本人に希望があれば認めても良い	1014	72.0%	69.0%
認めるべきではない	251	17.8%	19.4%
その他	44	3.1%	0.2%
無回答 平成10=わからない	12	0.9%	5.8%
合計	1409	100%	100%

Q7-2 あなたは散骨によって葬られることを希望しますか

あなたは散骨を希望するか	実数	構成比(1)	構成比(2)	平成10年(1)	平成10年(2)
全部の骨の散骨を希望	134	9.5%	12.3%	12.8%	17.2%
一部を散骨、残りをお墓に入れる	222	15.8%	20.4%		

希望しない	661	46.9%	60.9%	50.7%	68.0%
その他	69	4.9%	6.4%	11.1%	14.8%
散骨反対など	323	22.9%	--	25.4%	--
合計	1409	100%	100%	100%	100%

Q7-3 散骨をする場所について

散骨の場所について	実数	構成比(1)	構成比(2)	平成10年(1)	平成10年(2)
原則として自由に認めるべき	274	19.5%	26.6%	23.0%	30.8%
一定の制限を設けるべき	463	32.9%	45.0%	36.6%	49.1%
墓地の中に散骨場所を	--	--	--	9.4%	12.7%
わからない・無回答	293	20.8%	28.5%	5.6%	7.5%
散骨反対など	379	26.9%	--	25.4%	--
合計	1409	100%	100%	100%	100%

問8 無縁となったお墓は改葬され、整理・統合されてしまうことがあります（以下無縁改葬）という。平成11年5月1日から無縁改葬の手続きが簡素化されましたが、ご存知であったでしょうか。次の中から1つだけお選びください。

この質問は、平成11年5月に施行された無縁墳墓の改葬手続きの改正に対する周知度を尋ねたものである。「知っている」4.5%「聞いたことがある」15.8%、この合計値は20.3%である。

Q8 無縁墳墓の改葬の手続きの簡素化

手続きの改正	実数	構成比(1)
知っている	64	4.5%
聞いたことがある	223	15.8%
知らない	1114	79.1%
その他	3	0.2%
無回答	5	0.4%
合計	1409	100.00

改正以前の無縁改葬についての日刊新聞による公告についての周知度が10%にも満たなかったことを考えると、平成11年の改正の周知度が20%に達したことは評価できるかも知れない。しかし、墓地行政の担当者や墓地の経営者はこの周知のためにより一層の努力が必要であろう。

Q8-2 無縁墳墓の簡素化の手続き（年齢別＋男女別）

無縁墳墓の改組化の手続き	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60歳以上	男・計	女・計
知っている	1.9%	2.9%	3.9%	4.2%	7.4%	4.8%	4.3%
聞いたことがあるが詳しく知らない	7.5%	8.3%	12.9%	19.0%	23.4%	16.0%	15.7%
知らない	90.1%	88.8%	83.3%	75.8%	68.3%	78.6%	79.5%
その他	0.5%	0.0%	0.0%	0.3%	0.2%	0.1%	0.3%
無回答	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%	0.7%	0.4%	0.3%

Q8-2は、周知度を年齢別・男女別にまとめたものである。男女別では、その周知度に男女別の違いはそれほどないといって良いだろう。年齢別では、「知っている」「聞いたことがあるが詳しくは知らない」の合計値が、20歳代では9.4%であるのに対し、30歳代では10.2%、40歳代では16.8%、50代では23.2%、60歳代以上では30.8%であり、年齢に従ってその周知度は増していく。

問9 一般にお墓はどのようなときに無縁改葬されることになると思いますか。それぞれのケースについて回答を一つだけお選びください。

問9-1 お墓のあとつぎ（承継者）がいなくなったとき

問9-2 一定の期間、墓地使用のための管理費を支払わなくなったとき

問9-3 無縁と思われるお墓の前に縁故者確認のための立て札が一年間たてられ、最終的にそのお墓の縁故者がみつからないことが確認されたとき

問9-4 永代使用权付きの墓地を取得すれば、無縁改葬されることはない

Q9は、どのようなときに無縁墳墓の改葬手続きが開始されるのかについて尋ねたものである。「承継者がいなくなったとき」は無縁墳墓改葬の基本的な前提である。しかし、承継者がいなくなっても、26.0%の人が無縁改葬されないと考えている。

「管理費を支払わなくなったとき」には墓地使用权が取り消されることになるが、当然に無縁墳墓として改葬手続きが開始される訳ではない。しかし、52.3%の人が無縁改葬されると思っている。

「無縁と思われるお墓の前に縁故者確認のための立て札が一年間たてられ、最終的にそのお墓の縁故者がみつからないことが確認されたとき」は、具体的な改葬手続きについて説明したものである。これについても、39.8%がこのような手続きでは改葬されないと考えている。

Q9 どのようなときに無縁改葬されますか

どのようなときに、無縁墳墓として改葬	承継者がいなくなったとき	管理費を支払わなくなったとき	無縁と思われるお墓の前に立て札が一年間たてられ、最終的にそのお墓の縁	永代使用权を取得すれば無縁改葬されることはない
--------------------	--------------	----------------	------------------------------------	-------------------------

されますか					故者がみつからない とき			
	実数	構成比(1)	実数	構成比(1)	実数	構成比(1)	実数	構成比(1)
そう思う	1017	72.2%	743	52.7%	801	56.8%	903	64.1%
そう思わない	367	26.0%	632	44.9%	561	39.8%	460	32.6%
無回答	25	1.8%	34	2.4%	47	3.3%	46	3.3%
合計	1409	100%	1409	100%	1409	100%	1409	100%

「永代使用権付きの墓地を取得すれば、無縁改葬されることはない」（質問文も同じ）は「永代使用権」と呼ばれる墓地使用権の意味について尋ねたものである。「永代使用権」を取得した墓地であっても承継者がいないと無縁墳墓として改葬される。しかし、64.1%の方が無縁改葬は行われることはないと回答した。「永代使用権」ということばが多くの人々に誤解を与えている。墓地使用権や無縁改葬に関しての知識が必ずしも墓地使用者に対して正確に伝わっている訳ではない。墓地行政の担当者は広報活動を通じて無縁改葬の仕組みについて国民=市民に知らせる必要があるし、墓地経営者は墓地使用契約締結時にその契約内容やどのようなときに無縁改葬されるのかについて説明をして、墓地使用者に対して周知徹底する必要があるだろう。

問10 あなたには、葬式や法事を依頼する、昔からつきあいのあるお寺がありますか、ありませんか。次の中から1つだけお選びください。

Q10は、伝統的な寺壇関係が現在に至るまで存続しているかどうかについて尋ねたものである。全体では62.8%が「昔からつきあいのあるお寺がある」と回答した(Q10-1)。この回答を年齢別に見てみると、年齢が低くなればなるほど「ある」と回答する割合が少なくなり、高齢者ほど「ある」と回答した人が多い。60歳以上で「ある」と回答した人は333人(76.9%)であり、4分の3以上の人が寺壇関係をこれまで維持してきたことがわかる。

Q10-1 昔からつきあいのある寺

つきあいのある寺	実数	構成比(1)	構成比(2)
ある	880	62.4	62.8
昔はあった	63	4.5	4.5
ない	459	32.6	32.7
計	1402	99.5	100.0
無回答	7	.5	
合計	1409	100.0	

寺壇関係の維持では、一定の地域性が

「四国」(82.2%)「東北」(79.6%)「中国」(77.6%)の順に高い。また、一般には都市部が低い数値を示すが(「大都市」=53.1% [「首都圏」=44.4%]・「人口10万人以上」=58.4%、「10万人以下」=67.7%、「町村」=77.2%)、都市圏でも名古屋圏(74.1%)は例外的であり、近隣

の「東海」=73.5%よりも高い数値を示している。

Q10-2 「昔からつきあいのある寺」×年齢のクロス表 (無回答を除く)

昔からつきあいのある寺		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	合計
ある	実数	85	126	136	200	198	135	880
	構成比	40.3%	52.7%	58.6%	69.7%	76.4%	77.6%	62.8%
昔はあった	実数	6	11	13	10	13	10	63
	構成比	2.8%	4.6%	5.6%	3.5%	5.0%	5.7%	4.5%
ない	実数	120	102	83	77	48	29	459
	構成比	56.9%	42.7%	35.8%	26.8%	18.5%	16.7%	32.7%
合計	実数	211	239	232	287	259	174	1402
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Q10-3 「昔からつきあいのある寺」×地域のクロス表 (無回答を除く)

つきあいのある寺	ある		昔はあった		ない	
	実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
北海道	43	69.4%	1	1.6%	18	29.0%
東北	86	79.6%	6	5.6%	16	14.8%
首都圏	151	44.4%	21	6.2%	165	49.1%
関東	80	63.0%	2	1.6%	45	35.4%
北陸	44	68.8%	2	3.1%	18	28.1%
東山	36	72.0%	2	4.0%	12	24.0%
名古屋圏	40	74.1%	3	5.6%	11	20.4%
東海	60	73.2%	5	6.1%	17	20.7%
大阪圏	108	57.4%	7	3.7%	73	38.8%
近畿	39	78.0%	2	4.0%	9	18.0%
中国	59	77.6%	2	2.6%	15	19.7%
四国	37	82.2%	2	4.4%	6	13.3%
九州	97	61.0%	8	5.0%	54	34.0%

合計	880	62.8%	63	4.5%	459	32.7%
----	-----	-------	----	------	-----	-------

問11 あなたには、そのようなお寺や地域の神社（氏神）とは別に、宗教団体に入っていますか、いませんか。次の中から1つだけお選びください。

問11で「1.ある」「2.昔あったが今はない」を選んだ人に

SQ11-1 そのような宗教団体に入ったのはいつですか。次の中から1つだけお選びください。

Q11は、伝統的な檀那関係にある寺や地域の氏神とは別の宗教団体に加入しているかどうか尋ねたもので、全回答者の10.3%が「入っている」と答えた（Q11-1）。宗教団体に加入

Q11-1 宗教団体に加入（檀那寺・氏神をのぞく） 入っていると回答した人114人のうち85人

宗教団体	実数	構成比	構成比
入っている	144	10.2%	10.3%
昔は入っていた	17	1.2%	1.2%
入っていない	1245	88.3%	88.5%
合計	1406	99.8%	100.0%
無回答	3	.2%	
合計	1409	100.0%	

（59.0%）は、従来の寺壇関係を維持したままであり、寺壇関係を維持しながら新たな宗教団体にも加入している人が6割に及んでいる。「入っている」と回答した人は、男性（7.7%）に比べて女性が多く（12.6%）、また未婚者（6.5%）の比べて既婚者が多く、既婚者の中でも配偶者がいる人（9.9%）よりも死別（18.7%）・離婚（16.0%）している人に多い。

Q11-2 昔からつきあいのある寺 × 宗教団体に加入（檀那寺・氏神をのぞく）のクロス表

宗教団体に加入		宗教団体に加入（檀那寺・氏神をのぞく）			合計
		入っている	昔は入っていた	入っていない	
昔から寺とつき	ある	実数	85	5	789
		構成比	59.0%	29.4%	63.6%
あいがあるかどうか	昔はあった	実数	11	4	48
		構成比	7.6%	23.5%	3.9%
	ない	実数	48	8	403
		構成比	33.3%	47.1%	32.5%
合計		実数	144	17	1240
		構成比	10.3%	1.2%	88.5%
					100.0%

Q11-3 宗教団体に入った時期

宗教団体	実数	構成比(1)	構成比(2)
自分や配偶者の代に入った	58	4.1%	36.5%
親の代に入った	64	4.5%	40.3%
それ以前から続いている	26	1.8%	16.4%
その他	4	.3%	2.5%
わからない	7	.5%	4.4%

宗教団体への加入は、「親の代に入った」と回答した人が多く（40.3%）、「それ以前から入っている」（16.4%）を含めると半数を超える56.7%の人々が親の世から引き継いでいることになる。なお、宗教団体に加入している職業としては、「自営業・自由業」（28.0%）「自営家族従業者」（20.5%）が多い。

小計	159	11.3%	100.0%
無回答（入っていないを含む）	1250	88.7%	
合計	1409	100.0%	

問12 あなたのお宅には仏壇がありますか、ありませんか。次の中から1つだけお選びください。

問12で、「1. ある」「2. 仏壇はないが、場所を定めて、位牌や故人の写真などを飾っている」を選んだ人に

SQ12-1 あなたは普段、仏壇などをどの程度拝みますか。次の中から1つだけお選びください

問13 あなたのお宅には神棚がありますか、ありませんか。次の中から1つだけお選びください。

問13で「1. ある」「2. 神棚はないが、場所を定めて、お札などを置いている」を選んだ人に

SQ13-1 あなたは普段、神棚などをどの程度拝みますか。次の中から一つお選びください。

Q12とQ13は、仏壇と神棚の有無について尋ねたものである。「仏壇」と「神棚」と施設の内容は異なるが、同じような質問が続くので、比較の意味もあっていっしょに説明を加えたい。

Q12-1 仏壇がありますか				Q13-1 神棚がありますか			
事項	実数	構成比(1)	構成比(2)	事項	実数	構成比(1)	構成比(2)
ある	738	52.3%	52.9%	ある	656	46.5%	46.6%
位牌を飾っている	73	5.2%	5.2%	お札などを置いている	92	6.5%	6.5%
ない	583	41.3%	41.8%	ない	659	46.7%	46.8%
小計	1394	98.9%	100.0%	小計	1407	99.8%	100.0%
無回答	15	1.1%		無回答	2	0.2%	
合計	1409	100.0%		合計	1409	100.0%	

「仏壇がある」と回答した人は52.9%、「神棚がある」と回答した人は46.6%であり、「仏壇がある」と回答した人が6%強多い。神棚をもたない人が過半数を超え、仏壇をもたない人も過半数に迫る勢いである。

都市規模別(Q12-2)では、大都市ほど「仏壇」「神棚」がない傾向が強く、大都市では約6割の人が仏壇も持たず、約4分の3の人が神棚を持っていない。仏壇と神棚の都市規模別の格差は大きく、それぞれの保有率は、「大都市」では41.4%・25.1%であるのに対し、

「町村」では 67.0%・73.7%となっていて、「町村」では仏壇よりも神棚の保有率が高くなっている。

地域別(Q13-3)では、仏壇を持っている人が多いのは「東北」(72.5%)・「四国」(68.9%)・「中国」(68.0%)・「東山」(68.0%)の順であり、神棚は「東北」(86.2%)・「北陸」(82.8%)・「四国」(80.0%)・「東山」(70.0%)と続いている。「仏壇」も「神棚」も同じような地域で保有率が高い傾向を示すが、「北陸」=60.9%・82.8%、「四国」=68.9%・80.0%、「名古屋圏」=52.8%・63.0%、「東海」=58.5%・60.7%のように、仏壇よりも神棚の保有率が高く、両者の保有率について逆転現象が起こっている地域もある。

逆に、仏壇を持たない割合が高いのは、首都圏(52.1%)・大阪圏(53.7%)・北海道(50.0%)であり、神棚についても「首都圏」(69.0%)・「大阪圏」(61.7%)・「北海道」(53.2%)であり、首都圏・大阪圏・北海道で仏壇や神棚をもたない人が多い。

Q13-2 「仏壇」「神棚」と都市規模別のクロス表

仏壇・神棚がありますか		仏壇				神棚			
		ある	位牌を飾っている	ない	合計	ある	お札などを置いている	ない	合計
大都市	構成比	130	23	161	314	80	25	214	319
	実数	41.4%	7.3%	51.3%	100.0%	25.1%	7.8%	67.1%	100.0%
人口10万以上	構成比	261	28	252	541	205	43	298	546
	実数	48.2%	5.2%	46.6%	100.0%	37.5%	7.9%	54.6%	100.0%
人口10万以下	構成比	152	8	88	248	155	11	83	249
	実数	61.3%	3.2%	35.5%	100.0%	62.2%	4.4%	33.3%	100.0%
町村	構成比	195	14	82	291	216	13	64	293
	実数	67.0%	4.8%	28.2%	100.0%	73.7%	4.4%	21.8%	100.0%
合計	構成比	738	73	583	1394	656	92	659	1407
	実数	52.9%	5.2%	41.8%	100.0%	46.6%	6.5%	46.8%	100.0%

また、「仏壇を持っていないけれども位牌を飾っている」「神棚はないけれどもお札を置いている」と回答した人が、それぞれ 5.2%・6.5%いて、大都市部においてはそれぞれ 7.3%・7.8%となっており、比較的高い数値を示している。

(略)

Q12-SQ1-1 仏壇などをどの程度拝むか

仏壇を拝む頻度	実数	構成比	構成比(2)
ほぼ毎日	442	31.3	54.8
週に1~2回	95	6.7	11.8
月に1~2回	93	6.6	11.5
年に3~5回	72	5.1	8.9
年に1~2回	42	3.0	5.2
ほとんど拝まない	59	4.2	7.3
その他	4	.3	.5
小計	807	57.2	100.0
無回答(仏壇がないを含む)	602	42.8	
合計	1409	100.0	

(略)

Q13-SQ1-1 神棚などをどの程度拝むか

神棚を拝む頻度	実数	構成比(1)	構成比(2)
ほぼ毎日	240	17.0	32.4
週に1～2回	63	4.5	8.5
月に1～2回	130	9.2	17.6
年に3～5回	86	6.1	11.6
年に1～2回	119	8.4	16.1
ほとんど拝まない	99	7.0	13.4
その他	3	.2	.4
合計	740	52.5	100.0
無回答(神棚がないを含む)	670	47.5	
合計	1409	100.0	

(以下略)

問14 葬式についてのあなたのお考えをお聞かせください。

問14-1 葬式にはいろいろな意味が含まれていますが、あなたがもっとも大切だと考えるものを、次の中から1つだけお選びください

Q14-1 の選択肢は「1 死者を死後の世界(天国・浄土・成仏など)に送るための儀礼である(死後の世界に送る)」「2 死者とお別れをするための儀礼である(死者とお別れをする)」「3 親しい人の死を受け入れるための儀礼である(親しい人の死を受け入れる)」「4 死者を偲ぶ(追悼する)ための儀礼である(死者を偲ぶ[追悼する])」「5 遺族におくやみを述べる(弔問する)ための儀礼である(遺族にお悔やみを述べる)」の5つである。

Q14-1-1 葬式の意味

葬式の意味	実数	構成比(1)	構成比(2)
死者を死後の世界に送る	535	37.9%	38.5%
死者とお別れをする	509	36.1%	36.6%
親しい人の死を受け入れる	69	4.9%	5.0%
死者を偲ぶ(追悼する)	241	17.1%	17.3%
遺族にお悔やみを述べる	37	2.6%	2.7%
合計	1391	98.7%	100.0%
無回答	18	1.3%	
合計	1409	100.0%	

全体では「死後の世界へ送る」(38.5%)「お別れをする」(36.6%)、「死者を偲ぶ」(17.3%)の順に多い。

これを年齢別に見ると、「死後の世界に送る」は、年齢とともにその割合が高くなり、60歳代では46.3%、70歳代では46.7%であるのに対し、

20歳代では30.5%とその割合は低い。「死者とお別れをする」は、80歳代で高い割合を示すが、必ずしも年齢による変化は顕著とは言えない。それに対して、「死を受け入れる」及び「死者を偲ぶ」は、比較的若い年齢層で高い割合を示すことになる。「死を受け入れる」と回答した人は、40歳代以下で平均(5.0%)以上の高い数値を示し、「死者を偲ぶ」についても40歳代=20.3%、30歳代=22.1%、20歳代=19.5%とほぼ同様の傾向が窺える。

ここでは、「死後の世界に送る」「死者を偲ぶ(追悼する)」という2つの変数とをめぐって、年齢や次の学歴など別の変数を掛け合わせたときに変化があらわれており、「死者

とお別れをする」「お悔やみを述べる」については他の変数を掛け合わせても大きな変化は見られない。

Q14-1-2 葬式の意味 × 年齢 のクロス表

葬式の意味		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	合計
死者を死後の世界に送る	実数	64	82	80	111	118	80	535
	構成比	30.5%	34.9%	34.6%	38.5%	46.3%	46.5%	38.5%
死者とお別れをする	実数	79	82	84	107	92	65	509
	構成比	37.6%	34.9%	36.4%	37.2%	36.1%	37.8%	36.6%
親しい人の死を受け入れる	実数	18	13	17	12	8	1	69
	構成比	8.6%	5.5%	7.4%	4.2%	3.1%	6%	5.0%
死者を偲ぶ(追悼)する	実数	41	52	47	51	30	20	241
	構成比	19.5%	22.1%	20.3%	17.7%	11.8%	11.6%	17.3%
遺族にお悔やみを述べる	実数	8	6	3	7	7	6	37
	構成比	3.8%	2.6%	1.3%	2.4%	2.7%	3.5%	2.7%
合計	実数	210	235	231	288	255	172	1391
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Q14-1-3 葬式の意味 × 学歴 のクロス表

葬式の意味		中学校(旧制小学校)	高校(旧制中学・高等女学校)	短大・高専(旧制高校)	大学・大学院	合計
死者を死後の世界に送る	実数	104	287	80	62	533
	構成比	49.3%	38.7%	43.2%	24.8%	38.4%
死者とお別れをする	実数	72	272	64	101	509
	構成比	34.1%	36.7%	34.8%	40.4%	36.7%
親しい人の死を受け入れる	実数	7	32	9	20	68
	構成比	3.3%	4.3%	4.9%	8.0%	4.9%
死者を偲ぶ(追悼)する	実数	21	132	27	61	241
	構成比	10.0%	17.8%	14.6%	24.4%	17.4%
遺族にお悔やみを述べる	実数	7	19	5	6	37
	構成比	3.3%	2.6%	2.7%	2.4%	2.7%
合計	実数	211	742	185	250	1388
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Q14-1-3 は、学歴別にまとめたものである。学歴別の回答者の数にばらつきがあるが、「中学校」「高校」「短大」の卒業では、「死後の世界に送る」「死者とお別れをする」「死者を偲ぶ」の順であるが、「大学・大学院」卒業では「死者とお別れをする」「死後の世界に送る」「死者を偲ぶ」の順であり、あとの2つの数値はほとんど差異はないと言って良い。つまり、「死者とお別れをする」というのはあらゆる学歴層で回答が多かったが、対照を示すのは「死後の世界に送る」（「中学校」49.3%、「大学・大学院」24.8%）と「死者を偲ぶ」（「中学校」10.0%、「大学・大学院」24.4%）である。この傾向は、Q14-1-2の年齢別の傾向でも窺うことができ、葬式の意味についての考え方の違いは「死者をあの世に送る」と考えるか、「死者を偲ぶ」と考えるのか、この2つの考え方の違いに表現されている。

Q11-1-4 性別 と 葬式の意味 のクロス表

葬式の意味		死者を死後の世界に送る	死者とお別れをする	親しい人の死を受け入れる	死者を偲ぶ(追悼する)	遺族にお悔やみを述べる	合計
男	実数	229	264	38	130	19	680
	構成比	33.7%	38.8%	5.6%	19.1%	2.8%	100.0%
女	実数	306	245	31	111	18	711
	構成比	43.0%	34.5%	4.4%	15.6%	2.5%	100.0%
合計	実数	535	509	69	241	37	1391
	構成比	38.5%	36.6%	5.0%	17.3%	2.7%	100.0%

Q14-1-4 は、男女別にまとめたものである。女性の方が「死者を死後の世界に送る」と回答した者が約1割程度多く、「死者を偲ぶ(追悼する)」と回答した女性が約4.5%少ない結果になった。男女の年齢と比較してみると「死者を死後の世界に送る」のは20歳代では男性=24.0%・女性=36.8%、30歳代ではそれぞれ29.8%・40.4%、40歳代で27.9%・40.8%、50歳代で32.6%・43.4%、60歳で41.8%・51.2%と女性の割合が高いが、70歳以上では49.4%・44.3%と男性の方が高い割合を示すようになる。比較的若い世代で男女間の差異が明瞭になっている。

(以下略)

問14-2 「葬式は一般には、死者や遺族の社会的地位にふさわしく行うべきものである」という意見をどのように考えますか。次の中から1つお選びください。

Q14-2 は、死者や遺族の社会的地位と葬式の関係について尋ねたものである。「そう思う」(14.5%)「どちらかといえばそう思う」(23.7%)をあわせると、38.2%であり、「そう思わない」(25.5%)「どちらかといえばそう思わない」(35.5%)をあわせると61.0%であり、葬式を死者及び遺族の社会的地位にふさわしくすべきだと考える人が約4割、そうではないと考える人が約6割であった。

Q14-2-1 死者や遺族の社会的地位にふさわしく行うべき

社会的地位にふさわしい葬式	実数	構成比(1)	構成比(2)
そう思う	205	14.5	14.7
どちらかといえばそう思う	334	23.7	23.9
どちらかといえばそう思わない	360	25.5	25.7
そう思わない	500	35.5	35.7
合計	1399	99.2	100.0
無回答	10	.8	
合計	1409	100.0	

これを年齢別に見ると、70歳以上になれば、6割程度の人々が肯定的に回答していて、70歳未満の年齢層と顕著な対照を示している。学歴別では、「大学・大学院」卒で否定的な回答が7割を超え、肯定的回

答は職業別では、「農林漁業者」(60.5%)が多い。

Q14-2-2 死者や遺族の社会的地位にふさわしく行うべき × 年齢 のクロス表

社会的地位と葬式		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	合計
そう思う	実数	20	31	25	34	48	47	205

	構成比	9.4%	13.1%	10.7%	11.8%	18.8%	27.0%	14.7%
どちらかと言えば そう思う	実数	58	50	57	61	53	55	334
	構成比	27.4%	21.1%	24.5%	21.2%	20.8%	31.6%	23.6
どちらかと言え ばそう思わない	実数	49	65	57	88	68	33	360
	構成比	23.1%	27.4%	24.5%	30.6%	26.7%	20.0%	25.7
そう思わない	実数	85	91	94	105	86	39	500
	構成比	40.1%	38.4%	40.3%	36.5%	33.7%	22.4%	35.7
合計	実数	212	237	233	288	255	174	1399
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0

Q14-2-3 死者や遺族の社会的地位にふさわしく行うべき × 学歴 のクロス表

死者や遺族の社会的地位にふさわしく 行うべきか		中学校(旧 制小学校)	高校(旧制中学 ・高等女学校)	短大・高専(旧制高校)	大学・大学 院	合計
そう思う	実数	55	107	22	21	205
	構成比	25.9%	14.3%	11.8%	8.4%	14.7%
どちらかと言え ばそう思う	実数	59	175	42	56	332
	構成比	27.8%	23.4%	22.6%	22.4%	23.8%
どちらかと言え ばそう思わない	実数	44	210	43	63	360
	構成比	20.8%	28.1%	23.1%	25.2%	25.8%
そう思わない	実数	54	256	79	110	499
	構成比	25.5%	34.2%	42.5%	44.0%	35.7%
合計	実数	212	748	186	250	1396
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

問14-3 「葬式は一般には、死者の意志を尊重して行うべきものである」という意見をどのように考えますか。次の中から1つお選びください。

Q14-3 は、葬式を行うとき死者の意志を尊重すべきかどうか尋ねたものである。「そう思う」(54.7%)「どちらかと言えばそう思う」(38.3%)をあわせると、93.0%と高い数値を示し、死者の意志を尊重するというのは社会全体のコンセンサスになったと言っても良いだろう。

「そう思う」と回答した人を年齢別に見ると、20歳代(61.3%)と80歳代(71.4%)以上で

Q14-3-1 死者の意志を尊重して行うべき

死者の意志を尊重して行うべき	実数	構成比(1)	構成比(1)
そう思う	767	54.4	54.7
どちらかと言え ばそう思う	537	38.1	38.3
どちらかと言え ばそう思わない	53	3.8	3.8
そう思わない	44	3.1	3.1
合計	1401	99.4	100.0
無回答	8	.6	
合計	1409	100.0	

特に高いが「どちらかと言え
ばそう思う」をあわせると年齢による差異は顕著に表れてこない。

学歴別に見ると、意志を尊重することに高学歴ほど肯定的であり、「大学・大学院」卒の97.5%が肯定的な回答を行った。

Q14-3-2 死者の意志を尊重して行うべき × 構成比年齢 のクロス表

死者の意志を尊重して行	構成比年齢	合計
-------------	-------	----

うべき		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	
そう思う	実数	130	136	121	152	131	97	767
	構成比	61.3%	56.9%	51.9%	52.8%	51.2%	56.1%	54.7%
どちらかと言え ばそう思う	実数	68	90	99	115	102	63	537
	構成比	32.1%	37.7%	42.5%	39.9%	39.8%	36.4%	38.3%
どちらかと言え ば そう思わない	実数	6	8	9	9	13	8	53
	構成比	2.8%	3.3%	3.9%	3.1%	5.1%	4.6%	3.8%
そう思わない	実数	8	5	4	12	10	5	44
	構成比	3.8%	2.1%	1.7%	4.2%	3.9%	2.9%	3.1%
合計	実数	212	239	233	288	256	173	1401
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Q14-3-3 死者の意志を尊重して行うべき × 学歴 のクロス表

葬式: 死者の意志を尊重して行うべき		中学校(旧制 小学校)	高校(旧制中学 ・高等女学校)	短大・高専(旧 制高校)	大学・大学 院	合計
そう思う	実数	110	388	116	151	765
	構成比	52.1%	51.7%	61.7%	60.6%	54.7%
どちらかと言え ばそう思 う	実数	77	307	60	92	536
	構成比	36.5%	40.9%	31.9%	36.9%	38.3%
どちらかと言え ばそう思 わない	実数	10	31	9	3	53
	構成比	4.7%	4.1%	4.8%	1.2%	3.8%
そう思わない	実数	14	24	3	3	44
	構成比	6.6%	3.2%	1.6%	1.2%	3.1%
合計	実数	211	750	188	249	1398
	構成比	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

問14-4 あなたは、ご自分の葬式の規模についてどのように希望しますか。次の中から1つお選びください。

Q14-4-1 自分の葬式の規模

自分の葬式の規模	実数	構成比(1)	構成比(2)
お金をかけて行う	8	.7	.6
人並みの葬式を	270	19.2	19.2
質素な葬式	555	39.4	39.5
葬式を行わない	78	5.5	5.6
特に希望はない	475	33.7	33.8
その他	18	1.3	1.3
小計	1404	99.6	100.0
無回答	5	.4	
合計	1409	100.0	

Q14-4 は、自分の葬式はどのような規模で行いたいかを尋ねたものである。回答は、「質素な葬式」が39.5%もっとも多く、「特に希望がない」(33.8%)「人並みの葬式を」(19.2%)と続いている。また、少数ではあるが、「葬式を行わない」と回答した人が5.6%出てきたことも注目しておく必要があるだろう。これ都市規模別に見たのが、Q14-4-2である。「人並みの葬式」は「大都市」で17.9%、「町村」で22.7%であり、「葬式を行わない」、もそれぞれ5.7%、4.1%であり、都市規模別で

は、顕著な差異を認めることはできない。

Q14-4-2 どのような規模の葬式を望むか × 構成比のクロス表

葬式の規模		お金をかけて葬式を行う	人並みの葬式を行う	質素な葬式	葬式を行わない	特に希望はない	その他	合計
大都市	実数	2	57	132	18	107	2	318
	構成比	.6%	17.9%	41.5%	5.7%	33.6%	.6%	100.0%
人口10万以上	実数	2	95	231	33	175	10	546
	構成比	.4%	17.4%	42.3%	6.0%	32.1%	1.8%	100.0%
人口10万以下	実数	1	52	90	15	87	4	249
	構成比	.4%	20.9%	36.1%	6.0%	34.9%	1.6%	100.0%
町村	実数	3	66	102	12	106	2	291
	構成比	1.0%	22.7%	35.1%	4.1%	36.4%	.7%	100.0%
合計	実数	8	270	555	78	475	18	1404
	構成比	.6%	19.2%	39.5%	5.6%	33.8%	1.3%	100.0%

これに対して、地域別ではいくつかの特徴を指摘できる。「人並みの葬式」と回答した人が少ない地域は「近畿」(8.0%)「北海道」(9.8%)「大阪圏」(11.7%)であり、「質素な葬式」と回答した人が多いのが四国(51.1%)「北海道」(49.2%)「東山」(48.0%)であり、「特に希望がない」と回答した人が多い地域は「近畿」(56.0%)「大阪圏」(38.3%)となっている。北海道は質素な葬式の傾向が強く、大阪・近畿圏は「特に希望がない」と葬式に関する無関心の傾向が強い。また、「葬式を行わない」と回答した人が多いのは、「首都圏」(8.6%)「中国」(7.9%)「東海」(7.1%)では比較的高い数値を示すが、「名古屋圏」(5.6%)「大阪圏」(5.9%)では他の地域との比較で特に数値を示した訳でない。

年齢別では、「人並みの葬式を行う」とするのは年齢が高くなるとその割合も高くなり80歳代では33.3%と全体の3分の1の割合となる。また、若い世代では「特に希望がない」

と回答した人が多く 20 歳代では 50.5%、30 歳代では 36.4%である。「質素な葬式」は 30 歳以上の人々のもっとも回答の割合が高い選択肢であった。(以下略)

問15 あなたは死後の靈魂の存在を信じますか、信じませんか。次の中から1つお選びください。

Q15は、死後の靈魂の存在について尋ねたものである。選択肢は、「1 信じる」「2 信じるというほどではないが、ありうると思う」「3 信じない」「4 わからない」の4つである。回答では、「ありうる」が最も多く 36.7%、「信じない」が 20.4%、「信じる」が 16.8%であり、「わからない」が 25.9%と全体の回答の4分の1を占めた。

年齢別とのクロス集計(Q15-1-2)を見ると、「信じる」と回答した人は40歳代が最も多く(22.3%)次いで20歳代が多く(20.4%)であり、最も少ないのが50歳代(10.5%)である。ただし、「信じる」と「ありうると思う」を合計すると年代による差異はほとんど見られない。学歴とのクロス集計(Q15-1-3)を見ても、学歴が高いほど「信じない」と回答した割合が多くなるが、それでも顕著な差異は認めることはできない。

性別のクロス集計(図表なし)を見ると、女性の方が「信じる」(17.5%)「ありうる」(39.8%)と回答し人が男性(「信じる」16.2%、「ありうる」

Q15-1-1 死後の靈魂を信じますか

死後の靈魂	実数	パーセント	構成比(1)
信じる	237	16.8	16.9
ありうると思う	516	36.6	36.7
信じない	288	20.4	20.5
わからない	365	25.9	26.0
合計	1406	99.7	100.0
無回答	4	.3	
合計	1409	100.0	

5%)1.に比べて多い。

地域別(Q15-1-4)では、「信じる」と回答した人が多いのは「近畿」(24.0%)「大阪圏」(20.2%)であり、逆に「信じない」と回答人が多いのは「四国」(24.4%)「近畿」(24.0%)「首都圏」(23.7%)となっている。「都市規模別」(Q15-1-5)の中でも顕著な差異を認めることはできない。

Q15-1-2 死後の靈魂を信じますか × 年齢 のクロス表

死後の靈魂を信じますか		信じる	ありうると思う	信じない	わからない	
20-29歳	実数	43	68	44	56	211
	構成比	20.4%	32.2%	20.9%	26.5%	100.0%
30-39歳	実数	40	78	41	81	240
	構成比	16.7%	32.5%	17.1%	33.8%	100.0%
40-49歳	実数	52	89	36	56	233
	構成比	22.3%	38.2%	15.5%	24.0%	100.0%
50-59歳	実数	43	102	69	75	289
	構成比	14.9%	35.3%	23.9%	26.0%	100.0%
60-69歳	実数	27	112	64	55	258
	構成比	10.5%	43.4%	24.8%	21.3%	100.0%
70歳以上	実数	32	67	34	42	175
	構成比	18.3%	38.3%	19.4%	24.0%	100.0%
合計	実数	237	516	288	365	1406
	構成比分年	16.9%	36.7%	20.5%	26.0%	100.0%

(以下略)

【問15で「1.信じる」「2.信じるというほどではないが、ありうると思う」を選んだ方に】
 SQ15-1.死後の霊魂はどこにいますとお考えですか。あてはまるもの全てに○をおつけ下さい

SQ15-1は、Q15において死後の霊魂を「信じる」あるいは「ありうる」と回答した人に対し、霊魂はどこにいますのかについて尋ねたものである。「信じる」「ありうる」と回答した人は総計753人であるが、これに回答した者は744人である。744人が選択をした項目の総数は1,174であり、1人あたり1.578の項目を選択したことになる。

回答の中でも最も多いのは、「生者の心の中」(46.3%)、次に「天国・極楽・浄土」(43.7%)であり、「墓」(27.7%)「仏壇」(19.8%)と続いている。寺・山・海・死亡場所といった回答は少ない。

SQ15-1-1 霊魂はどこにいますか

どこにいますか	実数	構成比(1)	構成比(2)
墓	206	17.5%	27.7%
仏壇	147	12.5%	19.8%
寺など	27	2.3%	3.6%
死亡場所	62	5.3%	8.3%
山	8	0.7%	1.1%
海の彼方	9	0.8%	1.2%
天国・極楽・浄土	325	27.7%	43.7%
生者の心の中	344	29.3%	46.2%
その他	46	3.9%	6.2%
合計	1174	100.0%	157.8%

これを、年齢別(SQ15-1-2)に見ていくと、20～40歳代にかけては、回答にばらつきがあり、その傾向は必ずしも明確ではないが、60歳代を超えると「墓」「仏壇」も占める割合が高くなり。60歳代では63.8%。70歳代では60.6%であり、50歳未満の世代では「天国・極楽・彼岸」を選択するものが多かった。

SQ15-1-2 霊魂の所在 × 年齢

霊魂の所在	年齢	20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	合計
墓	実数	29	26	31	37	49	34	206
	構成比	26.6%	22.6%	22.0%	26.1%	35.5%	34.3%	27.7%
仏壇	実数	19	19	18	26	39	26	147
	構成比	17.4%	16.5%	12.8%	18.3%	28.3%	26.3%	19.8%
寺など	実数	5	3	2	4	6	7	27
	構成比	4.6%	2.6%	1.4%	2.8%	4.3%	7.1%	3.6%
死亡場所	実数	18	10	12	9	8	5	62
	構成比	16.5%	8.7%	8.5%	6.3%	5.8%	5.1%	8%
山	実数	2	1	2	2	0	1	8
	構成比	1.7%	0.8%	1.7%	1.7%	0%	0.8%	0.7%

	構成比	1.8%	.9%	1.4%	1.4%	0.0%	1.0%	1.1%
海の彼方	実数	3	1	3	0	1	1	9
	構成比	2.8%	.9%	2.1%	0.0%	.7%	1.0%	1.2%
天国・極楽・浄土	実数	52	64	67	53	51	38	325
	構成比	47.7%	55.7%	47.5%	37.3%	37.0%	38.4%	43.7%
生者の心	実数	44	46	73	71	70	40	344
	構成比	40.4	40.0%	51.8%	50.0%	50.73%	40.4%	46.2%
その他	実数	13	6	12	9	4	2	46
	構成比	28.3%	13.0%	26.1%	19.6%	8.7%	2.0%	6.2%

SQ15-2死者の霊魂は、生者の生活に影響を及ぼすと考えますか、考えませんか。
次の中から1つお選びください。

SQ15-2は、死者の霊魂が生活に及ぼす影響について尋ねたものである。「時として影響を及ぼす」が47.0%と最も多く、「わからない」(24.7%)「及ぼすことはない」(21.2%)「大いに及ぼす」(6.6%)となっている。「大いに及ぼす」「時として及ぼす」の合計値は53.6%出あり、半分以上の人々が何らかの形で生活に影響をあると考えている。

「大いに影響を及ぼす」の数値だけを見ると、70歳代(11.9%)・80歳代(16.7%)で高い数値を示すが、「時として及ぼす」との合計値になると、20歳代(59.4%)30歳代(58.1%)のように若い世代で高い数値を示し、逆に70歳代(46.4%)80歳代(33.4%)と高齢者の割合が低くなり、「及ぼすことがない」と回答した人も高齢者に多い(60歳代25.9%、70歳代26.2%、80歳代50.0%)。

SQ15-2-1 死者の霊魂が生者の生活に影響を及ぼすか

ここでは、霊魂をめぐる伝統的な意識の残存ではなく、新たな「霊魂観」の展開が見られているのかも知れない。

	実数	パーセント	有効パーセント
大いに影響を及ぼす	49	3.5%	6.6%
時に応じて及ぼす	349	24.8%	47.0%
及ぼすことはない	157	11.1%	21.2%
その他	4	.3%	.5%
わからない	183	13.0%	24.7%
合計	742	52.6%	100.0%
システム欠損値	668	47.4%	
合計	1410	100.0%	

SQ15-2-2 死者の霊魂が生者の生活に影響を及ぼすか × 年齢 のクロス表

死者の霊魂が生者の生活に影響を及ぼすか		大いに影響を及ぼす	時に応じて及ぼす	及ぼすことはない	その他	わからない	合計
1 20-29歳	実数	4	61	14	1	30	110
	構成比	3.6%	55.5%	12.7%	.9%	27.3%	100.0%
30-39歳	実数	7	61	22	0	27	117
	構成比	6.0%	52.1%	18.8%	.0%	23.1%	100.0%

40-49歳	実数	12	71	20	1	35	139
	構成比	8.6%	51.1%	14.4%	.7%	25.2%	100.0%
50-59歳	実数	6	65	38	2	33	144
	構成比	4.2%	45.1%	26.4%	1.4%	22.9%	100.0%
60-69歳	実数	8	59	35	0	33	135
	構成比	5.9%	43.7%	25.9%	.0%	24.4%	100.0%
70歳以上	実数	12	32	28	0	25	97
	構成比	12.4%	33.0%	28.9%	.0%	25.8%	100.0%
合計	実数	49	349	157	4	183	742
	構成比	6.6%	47.0%	21.2%	.5%	24.7%	100.0%

(以下略)

問16 戦没者の慰霊に関してさまざまな議論がありますが、あなたは国の戦没者慰霊施設についてどのように考えますか。次の中から1つお選びください。

この質問は、国の戦没者慰霊施設について尋ねたものである。この質問では、「わからない」がもっとも多く38.8%と4割近くに達し、「現状のままでよい」と考える人が30.3%、「新しい施設を設けるべき」が17.7%とこれに続いている。

「わからない」と回答した人は全体では4割程度であるが、40歳未満では5割を超えている。40歳を超えると「わからない」と回答する人は次第に減少している。「現状のままでよい」と回答した人は各年齢層において大きな差異はないが、「靖国神社を国の施設に」と回答した人は、平均では8.3%であるが、70歳以上では23.9%と各年齢層と比較して高い数字を示している。しかし、他の年齢層においては10%を超えることはない。

男女別(Q16-1-3)では「現状のままでよい」男性33.0%・女性27.7%、「新しい戦没者慰霊施設を設けるべき」男性20.1%・女性15.5%、「靖国神社を国の戦没者慰霊施設に」男性9.9%・女性6.7%、「千鳥ヶ淵戦没者墓苑を国の中心に」男性4.9%・女性2.5%となっている。また、女性の46.7%が「わからない」と回答している。

Q16-1-1 国の戦没者慰霊施設について

戦没者の祭祀	実数	構成比(1)	構成比(2)	構成比(3)
現状のままでよい	427	30.3%	30.4%	49.7%
新しい施設を設けるべき	250	17.7%	17.8%	29.1%
靖国神社を国の施設に	116	8.2%	8.3%	13.5%
千鳥ヶ淵墓苑を国の中心に	52	3.7%	3.7%	6.1%
その他	14	1.0%	1.0%	1.6%
わからない	547	38.8%	38.9%	—
無回答	3	0.2%	—	—
合計	1409	100.0%	100.0%	100.0%

構成比(3)は「わからない」を除いて構成比を出したものの。

Q16-1-2 年齢と戦没者慰霊施設についてのクロス表

戦没者慰霊施設について		現状のままでよい	新しい施設を設けるべき	靖国神社を国の施設に	千鳥ヶ淵簿縁を国の中心に	その他	わからない	合計
20-29歳	実数	64	22	11	4	3	108	212
	構成比	30.2%	10.4%	5.2%	1.9%	1.4%	50.9%	100.0%
30-39歳	実数	63	29	7	4	3	134	240
	構成比	26.3%	12.1%	2.9%	1.7%	1.3%	55.8%	100.0%
40-49歳	実数	66	52	8	10	3	94	233
	構成比	28.3%	22.3%	3.4%	4.3%	1.3%	40.3%	100.0%
50-59歳	実数	90	60	28	14	2	94	288
	構成比	31.3%	20.8%	9.7%	4.9%	.7%	32.6%	100.0%
60-69歳	実数	79	63	20	13	2	80	257
	構成比	30.7%	24.5%	7.8%	5.1%	.8%	31.1%	100.0%
70歳以上	実数	65	24	42	7	1	37	176
	構成比	36.9%	13.6%	23.9%	4.0%	.6%	21.0%	100.0%
合計	実数	427	250	116	52	14	547	1406
	構成比	30.4%	17.8%	8.3%	3.7%	1.0%	38.9%	100.0%

Q14-1-3 性別と戦没者慰霊施設についてのクロス表

戦没者慰霊施設について		現状のままでよい	新しい施設を設けるべき	靖国神社を国の施設に	千鳥ヶ淵簿縁を国の中心に	その他	わからない	合計
男	実数	227	138	68	34	8	211	686
	構成比	33.1%	20.1%	9.9%	5.0%	1.2%	30.8%	100.0%
女	実数	200	112	48	18	6	336	720
	構成比	27.8%	15.6%	6.7%	2.5%	.8%	46.7%	100.0%
合計	実数	427	250	116	52	14	547	1406
	構成比	30.4%	17.8%	8.3%	3.7%	1.0%	38.9%	100.0%

学歴別(Q16-1-4)では、高学歴になるほど「現状のままでよい」と回答する人は減って、「新しい施設を設けるべき」と回答する人が増えてくる。「わからない」と回答した人は、中学校卒がもっとも低く(32.7%)、大学・大学院卒がその次に低い(33.1%)。

Q16-1-4 学歴と戦没者慰霊施設についてのクロス表

		現状のままでよい	新しい施設を設けるべき	靖国神社を国の施設に	千鳥ヶ淵簿縁を国の中心に	その他	わからない	合計
中学校(旧制小学校)	実数	82	31	27	4	0	70	214
	構成比	38.3%	14.5%	12.6%	1.9%	.0%	32.7%	100.0%
高校(旧制中学・高等女学校)	実数	222	128	59	28	5	307	749
	構成比	29.6%	17.1%	7.9%	3.7%	.7%	41.0%	100.0%
短大・高専(旧制高校)	実数	55	34	7	5	3	85	189
	構成比	29.1%	18.0%	3.7%	2.6%	1.6%	45.0%	100.0%
大学・大学院	実数	68	57	22	15	6	83	251
	構成比	27.1%	22.7%	8.8%	6.0%	2.4%	33.1%	100.0%
合計	実数	427	250	115	52	14	545	1403
	構成比	30.4%	17.7%	8.2%	3.7%	1.0%	38.8%	100.0%

【問16で「2 新しい戦没者慰霊施設を設けるべきである」を選んだ方に】

SQ16-1 戦没者慰霊の新しい施設を設けた方が良いと考えるのはなぜですか。あなたの考えに近いものを3つ以内お選びください。

この質問は、Q16で「2 新しい戦没者慰霊施設を設けるべきである」と回答した250人(17.8%)の方に、その理由を尋ねたものである。回答は3つまでの複数回答を認めている。

その結果、回答者は一人あたり1.6の選択肢を選んでいるが、特定の回答に集中するのではなく、新たな入れ施設が必要だと考えるの理由が多様であることがわかる。少なくとも、いつの選択肢が50%を超えるものはなかった。

回答数が多い順に並べると、「宗教の自由の立場から、特定の宗教色を排除した戦没者慰霊施設が必要であるから」=47.2%、「戦没者に限らず、国や社会に貢献しながら平和活動やその他の活動を通じて罹災・死亡した人を一緒に慰霊することができる施設を国として設けるべきだから」=41.6%、「国民が戦争の記憶をとどめておくためにも、戦没者慰霊施設が必要であるから」=35.6%、「他の多くの国の例にあるように、国が戦没者慰霊施設をもつことは当然だから」=35.2%となった。「新しい慰霊施設を設けるべき」と回答した人々の内で、半数近くの人々が「宗教色がない施設が必要」と回答し、4割以上の人々が国として慰霊施設をもつべきであると回答している。

SQ16-1 年齢と新たに慰霊施設を設ける理由のクロス表

新しい施設を設ける理由		20-29歳	30-39歳	40-49歳	50-59歳	60-69歳	70歳以上	全体
国が設けるのは当然のこと	実数	7	10	12	20	29	10	88
	構成比	31.8%	34.5%	23.1%	33.3%	46.0%	41.7%	35.2%
宗教色がない施設が必要	実数	9	16	24	28	33	8	118
	構成比	40.9%	55.2%	46.2%	46.7%	52.4%	33.3%	47.2%
戦争を記憶するため	実数	9	9	19	24	16	12	89
	構成比	40.9%	31.0%	36.5%	40.0%	25.4%	58.3%	35.6%
国に貢献した人の慰霊	実数	8	13	27	26	21	9	104
	構成比	36.4%	44.8%	51.9%	43.3%	33.3%	37.5%	41.6%
その他	実数	1	0	3	0	1	0	5
	構成比	4.5%	—	5.8%	—	1.6%	—	2.0%
合計	実数	22	29	52	60	63	24	250
	構成比	154.5%	165.5%	163.5%	163.3%	158.7%	162.5%	161.6%

年齢別のクロス集計を見てみると、いくつかの特徴をあげることができる。30歳代・40歳代・50歳代において「戦没者に限らず、国や社会に貢献しながら平和活動やその他の活動を通じて罹災・死亡した人を一緒に慰霊することができる施設を国として設けるべきだから」と回答した人がそれぞれ44.8%、51.9%、43.3%と相対的に高い数値を示し、戦没者慰霊施設だけを目的にしたものではなく、広く社会的貢献をした人の慰霊あるいは顕彰のための施設を国として設ける必要性を認めている。70歳代以上では「戦争を記憶するため」と回答した人が58.3%を占めている。戦争を現実に体験した世代の声として注目をしておきたい。

戦没者慰霊に関する問題は、「わからない」と回答する人々が4割近くに達しているよ

うに、必ずしも国民的議論の方向性が明確になっていないことを示しているように思える。靖国神社の公式参拝がしばしばアジアの国々との間で摩擦・軋轢を引き起こしている現状を考えると、戦没者慰霊の問題は「わからない」というレベルで止めうる問題ではないだろう。戦没者等の慰霊問題は、国民への啓蒙活動を含めて、これからはより多様な議論の展開を必要にしているように思える。

フェイスシート（略）

おわりに

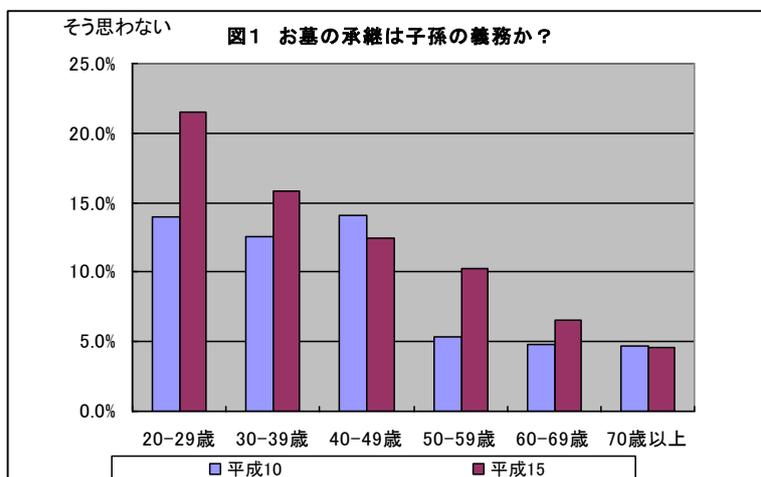
今回の調査結果について、若干のまとめを行っておこう。

(1)お墓をめぐる問題

「自分が抱える墓地問題」(Q1)については全体的には三分の一が何らかの問題を抱えていて、「お墓がない」ことや「墓地・墓石が高い」ことを指摘する人が相変わらず多い。お墓の承継問題も自分の入るお墓だけでなく、自分が承継したお墓の管理で悩む人も増えている。つまり、親から承継したお墓をどのように維持・管理するかという問題である。それに加えて、問題として「漠然とした不安」をあげる人もでてきており、墓地問題に対して一種の閉塞感を感じる人が多くなったように思われる。

自分の入るお墓をもっているかどうかの質問(Q2)に関しては、「お墓がない」と回答した人の割合は平成2年で35.7%、平成10年で21.8%、平成15年で29.7%であり、それぞれの調査によってばらつきがある。このばらつきについては詳細な分析を必要とするが、「親から受け継いだ(先祖伝来のお墓)お墓がある」が平成10年で50.3%であったものが、平成15年では38.0%と減っているのに対し、「墓地をもっていない(探していない)」が19.6%から28.1%と増加している。それぞれの調査で質問の仕方が若干異なっているのでその点を考慮に入れる必要があるし、またバブル崩壊の中でお墓の取得に関して様子を見ていたという一時的な現象かも知れないが、他方では〈お墓離れ〉の現象が起こっているようにも思える。

お墓の承継問題は多様な問題点を浮き彫りにしている。まず、自分が入るお墓の承継者問題(Q3)に関しては「決まった人も期待する人もいない」が、平成10年で10.6%、平成15年では19.9%に上昇し、承継者問題が深刻化していることがわかる。また、「お墓を継いでもらうことを希望しない」と回答する人も3.1%から7.7%に上昇し、伝統的な祭祀承継の揺らぎを読みとることができる。



伝統的な祭祀承継の揺らぎは、祖先祭祀についての意識にも現れてくる。お墓参りの頻度(Q4)は特に若い世代で少なくなる傾向にあり、お墓を承継してそれを守ることを子孫の義務とする考え方(祖先祭祀についての意識(図1を参考))についても「そう思わない」(「どちらかと言えばそう思わない」を含む)と考える

人が特に若い世代で増え(20歳代では平成10年で14.0%、平成15年で21.2%)、祖先祭祀についての考え方にも変化が生じている。

お墓の承継を必要としない合葬式の共同墓や散骨という新しい葬送にシステムに関して、徐々に浸透をしてきている。合葬式共同墓(Q6)も62.2%の人が周知するようになり、散骨に関して78.3%の人がこれを容認している。しかし、現実の利用度となると話は変わってくる。合葬式共同墓についてはこのような形態のお墓はやむを得ないと考える人が71.7%と七割を超え、全て遺骨を撒くという形式での散骨希望者は全体の9.5%に過ぎない。

最後に、Q8 と Q9 は無縁墳墓の改葬手続きの簡素化について尋ねた質問である。無縁墳墓の改葬手続きについての改正については「知っている」「聞いたことがある」を含めても全体で 2 割程度であり、周知度は必ずしも高いものではない。また、どのようなときに無縁改葬されるのかという点に関しても周知徹底していない。特に、「永代使用権を取得すれば無縁改葬されることはない」と考えている人が 64.1%に達している。「永代使用権」を取得してもお墓の承継者がいなくなると現実には無縁改葬される可能性がある。その意味では、「永代使用権」ということばが多くの人に誤解を与えている。墓地行政の担当者や墓地経営者は、無縁改葬手続きや墓地使用権について、より積極的な広報活動に努めるべきであろう。

墓地に関しての全国規模の意識調査は、これまでに 3 回ある。つまり、平成 2 年の総理府が実施したもの、平成 10 年に実施したもの、今回のものである。この 3 回の調査結果を詳細に分析することによって、この十数年間の墓地をめぐる意識の変化を明らかにすることができる。意識の変化は、大きく三つの方向に整理することが可能であろう。

①先祖のお墓をその子孫が承継するというシステムは我が国の伝統的な祭祀承継のあり方としてこの数百年の間維持されてきた。この伝統的なシステムが大きく動揺をはじめたことである。少子化の中でお墓のアトツギの確保が困難であるという問題だけではなく、承継したお墓をどのように管理するかという問題も表面化してきた。承継問題が多様化する中で、子孫によるお墓の承継を支えてきた祖先崇拜の意識も変容しようとしていることである。

②20 世紀の最後の 10 年に、少子社会に対応するために新しい葬送のあり方が提案されてきた。お墓の承継者を必要としない合葬式共同墓や散骨という新しい葬送のスタイルである。この十数年の間に合葬式共同墓や散骨の認知度は高まってきて、また葬送の多様なあり方を容認する傾向も一般的になってきた。しかし、これらの新しい葬送のスタイルを多くの人々が自分のために葬送のあり方として受容している訳ではない。つまり、現段階ではこれらが現状を打開するための解決策に必ずしもなっていないのである。これからもお新しい葬送のスタイルが提案され、より一層の多様化が進んでいくことになるだろう。

③混迷する葬送のスタイルの中で、「漠然とした不安を感じている」人が出てきたことである。30 歳代から 50 歳代にかけて、13~15%の人々が「漠然とした不安を感じている」と回答した。古いシステムが壊れて新しいシステムが創造される過程では不可避免的に生じる「不安」であろうが、このような不安は今後も拡大していくのではないだろうか。これからは、この「不安」を解消するような葬送の新しいシステム作りが必要であろう。

(2) 宗教団体・施設をめぐる問題

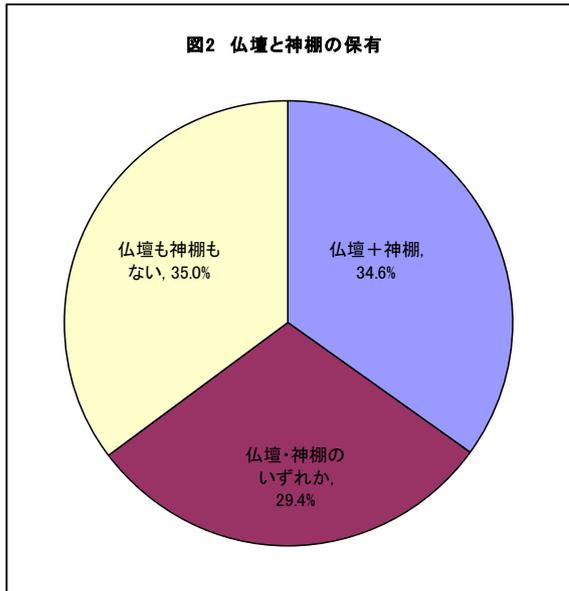
昔からつきあいのある寺があるかどうか、一般的には伝統的な寺壇関係が今日まで維持されているかどうかという問いに対し、62.8%の人々が寺壇関係を維持していると回答している。6 割以上の世帯で今日まで寺壇関係が維持されていることは驚異的とも言える高い数値と言えるかも知れないが、残念ながらこれと比較できるデータを持ち合わせていない。ただ、若い世代になるほどその数値は下がり、都市部ほどその数値は低い。つまり、いわゆる「寺離れ」の現象は、若い世代ほど、また都市部ほど進んでおり、将来寺壇関係がどのように変化していくかは注意しておく必要がある。ただし、都市部の名古屋圏に関しては例外であり、74.1%ときわめて高い数値を示している。この理由については明らかではない。

また、伝統的な氏神やお寺以外の宗教団体（新宗教団体）の加入に関しては、10.3%、約 1 割の人が加入している回答した。新宗教団体への加入者の内、伝統的な寺壇関係を維持しながら新宗教集団に加入している者が 9.7%、また新宗教集団への加入者の内 40.3%の

人々が親の代から。16.4%の人がそれ前の世代から引き継いだものであり、56.7%の人々が親あるいはそれ以前の世代から世襲によって引き継いだものでものだと回答している。

仏壇や神棚の保有率は、それぞれ 52.9%と 46.6%となっており、仏壇の保有率が 6.3%高くなっている。しかし、この保有率に関しては地域差が大きく、「北陸」「名古屋圏」「東海」「四国」ではその保有率が逆転している。

仏壇の神棚の保有率は下がってきている。朝日新聞の調査によると、1981年と1995年の仏壇の保有率は63%から59%、そして今回は52.9%、神棚の保有率はそれぞれ62%から54%、そして今回は46.6%へと下がる傾向にある。



また、図1は、仏壇と神棚の保有関係をまとめたものである。ここでは、「仏壇はないが、位牌を飾っている」「神棚はないがお札などを置いている」はそれぞれ「仏壇はない」「神棚はない」として計算をすると、「仏壇と神棚の両方がある」(34.6%)、「仏壇だけある」(18.3%)、「神棚だけある」(12.1%)、「神棚も仏壇もない」(35.0%)となった。「両方がある」「いずれかがある」「両方ともない」がそれぞれ三分の一程度の割合であるが、「仏壇も神棚もない」と回答した人がもっとも多いという結果になった。仏壇や神棚が家族(あるいは家)と結びついた伝統的な宗教の重要な施設であることを考えると、「伝統的

な宗教の揺らぎ」あるいは「脱宗教化」の傾向が窺えるように思う(鈴木岩弓「全国調査葬送と墓の意識(3)」『寺門興隆』2003年1月号を参照のこと)。

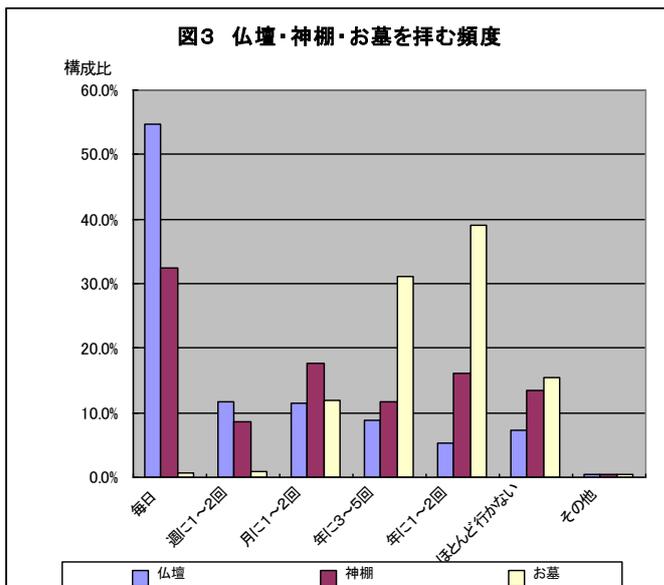


図2は、仏壇・神棚・お墓を拝む頻度をまとめたものである。仏壇と神棚はそれを所持している回答者に尋ねたものであり、お墓は全て人に尋ねたものであり、厳密な意味においては母集団が異なっている。そのことを踏まえてみても、仏壇や神棚が家族の日常生活空間の中に設けられた施設であるために拝む頻度は高いのに対し、お墓を拝むのは「年に3~5回」「年に1~2回」と回答した人が多く、多くの人々が仏壇や神棚とは異なった意味づけを与えているように思う。今後の調査では、仏壇とお墓との対応、神棚と神社

(氏神様)との対応を考慮に入れながら、神社(氏神様)への参拝がどのようになっているか、調査項目に加えるべきなのかも知れない。

(3) 葬式をめぐる意識

葬式の意味をめぐる設問は、東京都の「葬儀費用をめぐる調査」を念頭に置いたものであったが、東京都調査の選択肢は「故人とのお別れをする慣習的なもの」「故人の冥福を祈る宗教的なもの」「遺族のため」の4つであったが、私たちは「死者を死後の世界に送る儀礼」「死者とお別れをする儀礼」「死者を偲ぶ（追悼する）儀礼」「親しい人の死を受け入れる」「遺族にお悔やみを述べる儀礼」の5つに区分したので、同じ平面での比較はできない。

回答が比較的多かったのは「死後の世界に送る」(38.4%)「お別れをする」(36.7%)「死者を偲ぶ（追悼する）」(17.4%)の3つであるが、このなかで「お別れをする」と回答した割合は「年齢」「学歴」「男女別」「都市規模別」の比較において大きな差異を見いだすことはできなかった。「お別れをする」という変数で違いが見られたのは「地域」による差異であり、「大阪圏」で60.0%で高い割合を示し、「北海道」(22.6%)「四国」(25.0%)と低い数値であった。

「死後の世界に送る」「死者を偲ぶ（追悼する）」については、年齢が高く、学歴が低いほど、男性よりも女性が、都市規模が小さいほど前者の回答率が高いという傾向が示された。「地域」でも「首都圏」の「死後の世界に送る」の割合が27.8%ときわめて低い数値に止まった。この回答から見る限り、「死者を詩の世界に送る」という意識が伝統的な葬式の意味づけであり、「死者を偲ぶ（追悼する）」という意識が葬式についての比較的新しい意味づけを与えたものと位置づけることができるかも知れない。

今回の調査で特徴的なことの一つに、「葬式は一般に死者の意志を尊重して行うべきか」という問いに対して、「どちらかと言えばそう思う」と回答した人を含めると90%以上の人々が「そう思う」と回答したことである。過去において比較できる資料がないので時間の流れのなかでの変遷を示すことはできないが、祖先祭祀の意識の変化とともに注目すべき現象であろう。

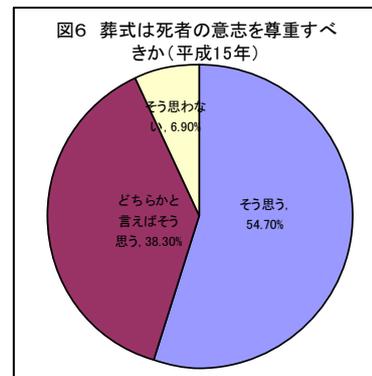
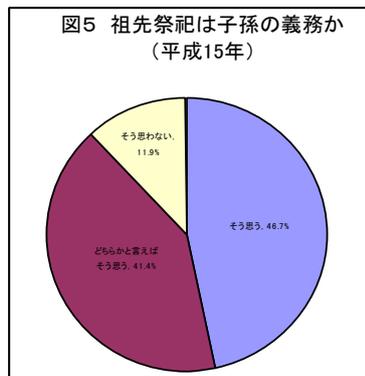
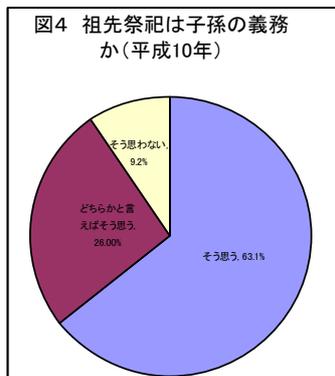


図3と図4は「先祖の墓を守るのは子孫の義務か？」の回答をまとめたものである。平成10年と平成15年の間で「そう思う」と回答した人が大きく減少していることがわかる。図5は「葬式は死者の意志を尊重して行うべきか？」の回答をまとめたものである。図5の回答を見てみると、奇妙なことに、図3と図4の中間値のような数値になっている。本来的には「先祖の墓を守るのは子孫の義務か？」と「葬式は死者の意志を尊重すべきか？」という問いの間には一定の距離があり、矛盾した側面を持っている。実際の回答を見ても、「先祖の墓を守るのが子孫の義務か」という問いに対して「そう思わない」と回答した人(6.1%)の内、69.4%が「葬式は死者の意志を尊重して行うべきか」の問いについては「そ

う思う」と回答していて、「そう思う」の回答の平均値（46.7%）よりも高い数値を示している。

とは言え、「祖先の墓を守るのは子孫の義務か?」「葬式は死者の意志を尊重すべきか?」という2つの問いにともに「そう思う」と回答する人が圧倒的多く、前者について「そう思う」と回答した人(46.7%)の内、後者についても60.3%の人が「そう思う」と回答し、「どちらかと言えばそう思う」と回答した人(34.3%)を含めると94.6%の人がこの2つの問いに肯定的な回答をしたことになる。このような現象をどのように評価するかはなお検討する余地は残されているもの、〈死者の意志を尊重した祖先祭祀〉という奇妙で矛盾を含んだ新しい意識の形成が進んでいるように思われる。

また、「奇妙で矛盾を含んだ新しい意識の形成」は、次のような意識の中にも表現されている。「祖先の墓を守るのは子孫の義務か?」の問いについてその肯定的な回答は88.1%という高い割合を占めるが、「葬式は死者や遺族の社会的地位にふさわしい行方べき」という問い(Q14-2)については61.4%が否定的な回答を行っている。また、自分の葬式に関しては「質素な葬式」を望むという回答が39.5%であり、「特に希望はない」と回答を除くと、「人並みの葬式」を望む人が30.0%に対し、「質素な葬式」を望む人が61.0%、「葬式を行わない」と回答した人が8.6%となり、「質素な葬式」「葬式を望まない」が約7割を占めるようになっている。

村上興匡が「葬儀は喪主や遺族の通過儀礼としての側面も有していたと考えられる。人並みの葬儀、葬儀の規模・格付への見栄などは、むしろ遺族の社会儀礼に関わるものであったと考えられるが、近年、葬儀がより個人化の傾向を強めてきたことにより、その社会的意味づけも全体としては弱められつつある。経営者の持ち株会社における社葬の場合などをのぞいて、死者のある種の公的な位置づけ、社会関係からの遺族への拘束力は弱くなっており、今日、葬儀の人生儀礼としての意味合いは薄くなっていると考えられる」（「都市的生活様式の普及と日本人の死生観の変遷についての社会史的研究」（平成13～15年度価格研究補助金研究成果報告書〔平成16年3月〕110頁）と論じているが、この傾向は、一定の地域性があることを考慮に入れたとしても、日本全体に妥当する傾向と言えるのではないだろうか。

(4) 死後の霊魂について

本調査の死後の霊魂についての分析は、すでに鈴木岩弓が行っている（鈴木、前掲の文献）。それを踏まえて、死後の霊魂観について簡単にまとめると次のようになる（ここにあげた数値は「無回答」を除いた構成比であり、鈴木が分析に用いた数字と若干ではあるが異なるケースも出てくる）。

- ① 死後霊魂の存在を肯定した回答は、これまでの新聞社などの調査に比べて（各種調査の平均値は45.8%）、本調査では高い数値(53.6%)であった。
- ② 死後霊魂の存在は、男性(49.7%)よりも女性の方(57.3%)が肯定的に捉える傾向がある。
- ③ 死後霊魂がどこにいるかという問いに関しては、日常的な死者を供養・追悼する場所(墓・仏壇・寺など)にいるのではなく、不可視的な抽象的世界（「天国・極楽・浄土・地獄・黄泉の国」）と考える人が多い。死後霊魂の存在を肯定的に捉えた回答者を100とした場合、死後霊魂のありかを「天国・極楽・浄土・地獄・黄泉の国」と回答した者は43.7%に及ぶ。
- ④ 死後霊魂と生者との繋がりに関しては、死後霊魂の存在に肯定的な回答をした100とした場合、男性は51.8%（「大いに影響を及ぼす」（6.0%）「時に応じて及ぼす」（45.8%）、女性は55.1%（それぞれ、7.1%・48.0%）、合計53.6%（それぞれ6.6%・47.0%）となっており、女性が肯定的に捉える傾向がある。

① 死後霊魂と生者の繋がりに関しては、年齢による違いもでてくる。50歳未満では死後霊魂が生者に影響を与えると回答した割合は5割を超え6割に達するのに対し、50歳以上では5割以下であり、70歳以上では45.4%に過ぎない。50歳以上は高度成長期の近代合理主義の影響を強く受けているのであろうか。

近年の『「宗教と社会」学会 宗教意識調査』の大学生に対する意識調査（第7回調査・平成13年）でも「神仏のタタリがある」と回答した者が8割に及ぶとする報告もある。高度成長の終焉の後、近代合理主義を超えた新しい「霊魂観」の形成が展開しているのかも知れない。

(5) 戦没者慰霊施設をめぐる

これまで戦没者慰霊の問題は、政治家達の靖国神社参拝問題や行政の公費の支出の問題などと絡みながら政治問題として取り上げられることが多かった。また、近年では小泉首相の靖国神社参拝をめぐる、特に中国や韓国との間で政治的な摩擦・軋轢が生じ、問題がより複雑になったと言えるだろう。

この問題が複雑な政治的なイデオロギーと結びつく問題であっただけに、この問題に関するオープンな議論は展開されず、国民のコンセンサスが何であるのか、また我が国における戦没者慰霊をどのように行うべきかという本格的な議論もこれまで必ずしも充分には展開されなかった。今回の私たちの戦没者慰霊施設をめぐる調査が、全国規模の調査としては初めてのものではないかと思う。ただ、今回の意識調査を見ても、「わからない」と回答した人が4割近くになり、また「現状のままでよい」という回答が半数近くに達していることからわかるように、問題を先送りするか、あるいは問題の論点そのものが必ずしも国民の多くの人々に理解されないまま、今日に至っているように思う。

また、今回に調査では、新しい戦没者のための慰霊施設が必要であると回答した人は全体の2割弱=17.7%に過ぎないが、なぜこのような施設が必要であるかについてコンセンサスもある訳ではない。現在、かつての戦争を記憶し、体験をした人々は60歳代に後半から70歳代以上の世代に限られるだろう。何のための戦没者の慰霊施設であるのかを問うた時、戦争体験者である70歳代以上の人々の58.3%が、戦争を記憶するために新しい慰霊施設が必要であると回答したことは注目をすべきことのように思う。